第70回全国高等学校PTA連合会大会

島根大会報告書

春の国宝松江城

ご縁（えん）づくり

～新たな明日への礎のために～

期日　令和3年 8月25日(水)

主催　一般社団法人全国高等学校PTA連合会

主管　島根県高等学校PTA連合会

●大会シンボルマーク

デザイン

島根県立出雲高等学校1年（平成30年度）

新　野　美　琴

作品の趣旨

　島根県の伝統工芸である勾玉（まがたま）、「神話の国」出雲地方に伝わる「因幡の白兎」を描き、過去から未来へと伝わる島根の伝統を表現しました。

また、叶結びを大きく描き、ひもを円に形作ることで、今回のテーマである「ご縁づくり」を表現しました。

●ポスター

デザイン

島根県立出雲高等学校2年（平成30年度）

若　槻　穂　波

作品の趣旨

　画面真ん中に向かって手を伸ばしていく構図にすることで「全国からPTA役員が集まり、縁を結ぶ」ことを表しました。

稲佐の浜の夕日をバックとし、雲の中に松江城、出雲大社を描くことで島根県の名所いくつかが一目でわかるようにしました。また、県花の牡丹で華やかさを添えています。

●大会要項表紙イラスト

デザイン

島根県立矢上高等学校3年（令和3年度）

河　手　風　雅

作品の趣旨

「しまねにおいでよ!」

　画面全体に島根県の伝統や文化、特産品を描きにぎわいを表現することで明るい絵にしました。たくさんの色で細かく描き、どこを見ても楽しめるようになっています。イラストから島根県の魅力を知っていただき、たくさん興味を持っていただけるとうれしいです。

（クイズ：絵の中に島根県各地に伝説のある河童がいます。何匹いるでしょう?）

全体会 開会式 8月25日(水)島根県民会館

開会式開式の辞(飯塚 大幸 実行委員会副会長)

泉 満 全国高P連会長 式辞

萩生田 光一 文部科学大臣 ビデオメッセージ

丸山 達也 島根県知事 祝辞

上定 昭仁 松江市長 祝辞

全体会　来賓紹介/表彰式

丸山 達也 島根県知事

上定 昭仁 松江市長

杉谷 学 出雲市教育長

田中 武夫 安来市長

吉山 治 雲南市副市長

野津 建二 島根県教育長

野々内 昭浩 島根県教育庁社会教育課長

常松 徹 島根県公立高等学校長協会会長

表彰式

表彰式

全体会　記念講演・公演

小泉 凡氏 記念講演

記念公演 小泉八雲朗読のしらべ

山本 恭司氏 ギター演奏

山本 恭司氏 ギター演奏

記念講演・公演お礼(前澤 信也 実行委員会副会長)

全体会　閉会式

全国高P連旗返還

石川大会紹介

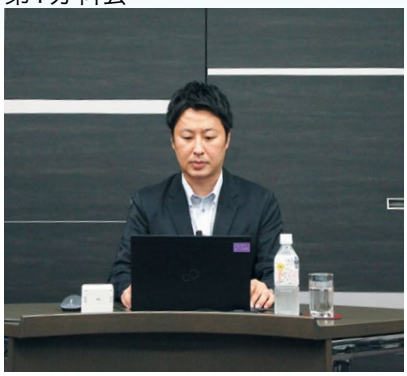
粟田 真人 石川大会実行委員会委員長 挨拶

閉会式開式の辞(今岡 正和 実行委員会副会長)

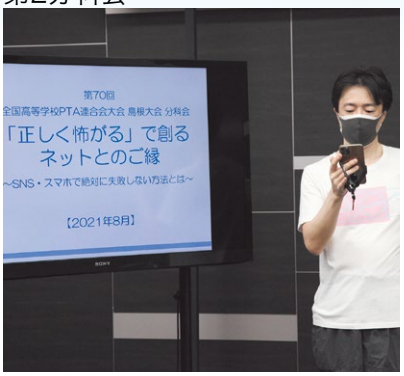
閉会の挨拶 大屋 光宏 実行委員会会長

分科会

第1分科会



第2分科会



第3分科会

第4分科会

第5分科会

第6分科会

アトラクション

島根県立松江商業高等学校 吹奏楽部

島根県立浜田商業高等学校 郷土芸能部

島根県立江津高等学校 神楽愛好会

島根県立三刀屋高等学校 演劇部

島根県立出雲農林高等学校 出農太鼓部

会場風景

全体会会場 島根県民会館

全体会係員打ち合わせ

全体会受付

全体会受付

全体会体温測定と手指消毒

全体会オンラインライブ配信

全体会中継カメラ

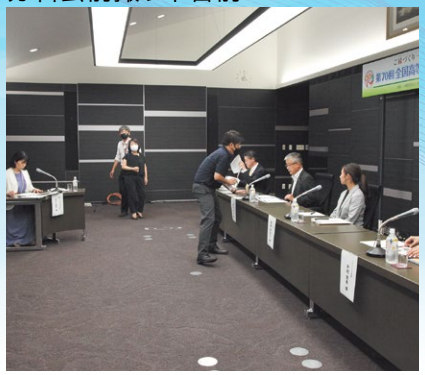
全体会会場

全体会全国高P連旗

分科会前撮り会場 さんいん中央テレビ

分科会出演者打ち合わせ

分科会前撮り本番前



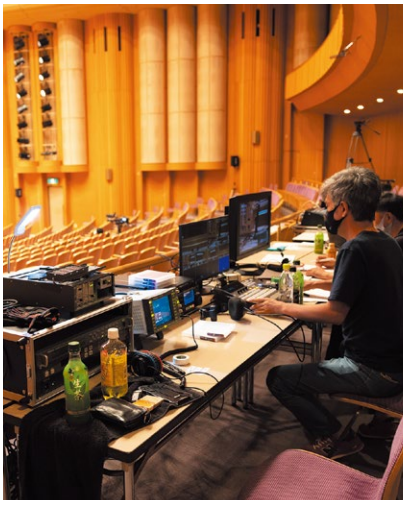
分科会録画風景

アトラクション前撮り会場松江プラバホール

アトラクション前撮り出演生徒到着

参加連合会紹介

アトラクション前撮り会場ホール



参加連合会紹介

第70回全国高等学校 PTA 連合会大会

島 根 大 会

大会報告書　目　次

グラビア

●全体会
　開会式
　来賓紹介／表彰式
　記念講演・公演
　閉会式
●分科会
●アトラクション
●会場風景

巻　頭　言

「頼まれごとは、試されごと」から始まり「情熱・熱意・執念」へ …… (1)
　第70回全国高等学校 PTA 連合会大会　島根大会実行委員会　会長　　大屋　光宏

寄　　稿

「想　い」…… (2)
　一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会　会長　　泉　　満
窮すれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し…… (3)
　島根県高等学校 PTA 連合会　会長　　飯塚　大幸

全　体　会

参加連合会紹介…… (4)
●島根県立松江商業高等学校 吹奏楽部 アトラクション …… (4)
●開会式…… (4)
●記念講演 …… (11)
「小泉八雲がみた日本の魅力　～五感でとらえた日本のすがた」　　小泉　凡
●記念公演 …… (17)
●島根県立浜田商業高等学校 郷土芸能部 アトラクション …… (18)
●閉会式 …… (18)

分　科　会

島根県立江津高等学校 神楽愛好会 アトラクション……(21)
島根県立三刀屋高等学校 演劇部 アトラクション……(21)
島根県立出雲農林高等学校 出農太鼓部 アトラクション……(21)

●第１分科会…… (22)
「With コロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」
～予測不可能な未来を生きていくには～
基調講演 …… (22)
模擬授業 …… (24)

●第２分科会…… (25)
「正しく怖がる」で創るネットとのご縁
～ SNS・スマホで絶対に失敗しない方法とは～
基調講演 …… (25)

●第３分科会…… (27)
「地域で育む未来への学び」～教育の魅力化でひろがる新たなご縁～
基調講演 …… (27)
パネルディスカッション …… (29)

●第４分科会…… (32)
体験でつなぐ人々とのご縁
～「人生100年時代」「不確かな時代」を生きるためのキャリアデザイン～
基調講演 …… (32)
パネルディスカッション …… (34)

●第５分科会…… (37)
グローバルにつなぐ教育とのご縁
～ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）と新たな明日への礎のために～
基調講演 …… (37)
パネルディスカッション …… (39)

●第６分科会…… (43)
未来社会に対応するための教育とのご縁
～「主体的・対話的で深い学び」や「学校と社会の連携・協働」のあり方～
基調講演 …… (43)
パネルディスカッション …… (46)

資　　料

大会日程・大会内容・会場等 …… (53)
大会までの主な歩み …… (54)
第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会島根大会運営組織（８月25日版）…… (57)
記　録　 …… (58)

編集後記

巻頭言

「頼まれごとは、試されごと」から始まり「情熱・熱意・執念」へ

第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会
島根大会実行委員会会長
大屋光宏

島根大会は予期せぬコロナ禍による１年延期、度重なる開催方法の変更など本当に紆余曲折ありましたが、８月25日に大会を開催し大会旗を石川県に引き継ぐことができました。

コロナ禍により多くの行事が中止となり、ＰＴＡ会員の学びの場も失われている状況での島根大会の開催でした。大会はオンラインでの配信・視聴としたため全国から会員の皆さんが集うことはできませんでしたが、例年より約400校あまり多い全国加盟校約４千校の６割に参加していただくことができました。70回という節目にふさわしい大会となるとともに、島根大会の実施とその大会内容に対して全国の会員の皆さんより多くの激励と高い評価をいただくことができました。

振り返れば、島根大会の開催が決定したのは平成29年６月の全国高等学校ＰＴＡ連合会定時総会でした。この時、新たに会長に就任された牧田和樹会長は就任あいさつにおいて「頼まれごとは、試されごと」というフレーズを引用されました。そして、次回開催県として大会旗を引き受けた令和元年８月の京都大会で、基調講演をされた永守重信氏の経営理念の一つは「情熱・熱意・執念」でした。

「頼まれごとは、試されごと」まるで今般のコロナ禍を予期したごとくの言葉でありましたが、全国高等学校ＰＴＡ連合会会長をはじめとする役員の皆さんの「情熱・熱意」そして学びの場を失くしてはならないという会員の皆さんの「執念」が、島根大会の開催につながったと思っています。

改めまして、ご指導いただきました泉満会長をはじめとする全国高等学校ＰＴＡ連合会役員の皆さん、多くの激励をいただきました全国の会員の皆さんに心よりお礼申しあげます。また、永年にわたり準備に関わっていただきました島根県内の歴代の会員の皆さん、ポスター・シンボルマーク等のデザインに応募していただいた高校生の皆さん、運営等を支援していただいた業者の皆さん、大会に出演していただいた講師の皆さん、アトラクションに参加していただいた高校生の皆さん、ご指導いただいた島根県及び松江市をはじめとする自治体そして大会に協賛いただいた企業の皆さん、本当にありがとうございました。

全体会の最後のアトラクションは石見神楽「ヤマタノオロチ」でした。オロチを退治したスサノオノミコトはオロチから助けたクシナダヒメとの新たな生活を夢見て「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」という日本最初の和歌を詠みました。

コロナ退治は難しいかもしれませんが、島根大会により生まれた「ご縁」が今後の仕事、生活そしてＰＴＡ活動の一助となり明日への希望につながることを願い、島根大会開催のお礼とさせていただきます。

寄稿

「想い」

一般社団法人　全国高等学校ＰＴＡ連合会
会長　泉　満

全国高Ｐ連大会島根大会は、新型コロナウイルス感染拡大により、非常事態宣言が各都道府県に出される中で全国高Ｐ連史上類のない大会実施となりました。全国的にも様々なイベントが中止に追い込まれる最中、全体会のオンラインライブ配信という開催方法は、今後の全国大会に新しい道をつけることにもなりました。何回も立ちはだかる困難を乗り越え、大会を開催されました島根県高Ｐ連並びに島根大会実行委員会の皆さまには心より敬意を表します。

大会開会式に於いて、誰もいないホールで挨拶をしている時、この向こう側にデジタルで参加いただいた全国の会員の皆さまと繋がっているのだという感慨がこみ上げてきました。想えば、会長職として激動の２年間でした。大会の１年延期の決定そしてオンライン開催の決断など、その度ごとに全国の県連の皆さまとも本音を出し合える熱い協議をさせていただきました。大会参加様式の方法等については元より、全国大会開催の意義そのものにも触れる熟議もありました。このことが、コロナ禍で揺れる社会にあって、あるいはコロナ終息後の社会にあっても、明日の全国高Ｐ連をより良い組織にしていく糧になったのではと思っております。全国の県連合会の皆さまにもここにお礼を申し上げます。

さて、本年は創立70周年という県連合会も多く、原稿を書く機会もたくさんございました。島根大会の報告書に寄稿するにあたり、少しトーンの変わったポエム調で筆を擱きたいと思います。皆さまのおかげで、島根大会が無事に終了いたしましたこと本当に感謝いたします。

今こそ創造性を開放する時代（とき）です。一人ひとりの中に眠る創造性がインターネットや開かれた知や道具の出現により、刺激され形にしようとする衝動力が沸き起こる時代。特にこうした課題や危機を前にした時、私たちの中で何かが少しづつ動き始めています。どんな未来を描いていくかは私たち次第です。この度の島根大会の学びが一人ひとりの中に輝く命の灯火を燃え上がらせ、生きる喜びや自信につながるものでありたいと願ってやみません。

寄稿

窮すれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し

～第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会島根大会の御礼～

島根県高等学校ＰＴＡ連合会
会長　飯塚大幸

第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会島根大会は、新型コロナウイルス感染症による１年延期を乗り越えて、予定通り令和３年８月25日に開催されました。いくつもの開催パターンを選択肢に据えて、毎日報告される全国の感染状況に翻弄されながら、全国高Ｐ連の皆様との調整を重ねて参りました。残念ながら関係者の願いもむなしく、全国から会員の皆様をお迎えすることは叶いませんでしたが、島根県民会館の大ホールから全国に向けてライブ配信・オンライン視聴というスタイルとなりました。前撮りされた６つの分科会の映像も一斉にユーチューブで公開されました。

当日の会場はリアルでした。泉満全国高Ｐ連会長始めとする役員諸氏、また次年度開催の石川県高Ｐ連の役員諸氏には遠路ご参集いただきました。島根県知事様、松江市長様始めとする来賓諸氏、講演・公演の講師先生方にもお越しいただき、アトラクションの生徒さん､地元高Ｐ連の会員諸氏､関係者スタッフの方々により粛々と進められました。幾多の困難を乗り換えて、大過なくよくぞここまでと思える素晴らしい大会でした。

今年の参加校は、全国加盟校約４千校中のおよそ６割に上り、例年を大きく上回ったのだそうです。配信された映像もネット上のアーカイブとして年末まで閲覧することができました。参加できなかった学校からはぜひ視聴したい、分科会の映像を学校で活用したいという要望もあったと聞いています。色々な意味で、今後の大会のあり方に一石を投じることになったと感じています。

改めまして、全国高Ｐ連役員の皆様、全国の会員の皆様、本当にお世話になりました。多年にわたり地元でご準備いただいた歴代会員の皆様、実行委員会の皆様、県高Ｐ連事務局の皆様、ご支援ご尽力いただいた多くの関係者の皆様に心より厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

古代中国の書物『易経』には、「窮すれば則ち変ず、変ずれば則ち通ず、通ずれば則ち久し」と説かれています。行き詰まったら変化する、変化すれば通じる、通じたならば久しく続く、という意味です。私たちも、苦しいときほど工夫して、変化して、継続して行く、これが大切であろうと思います。

２年にわたるコロナ禍により長らく停滞していたＰＴＡ活動は、各地で少しずつ動き出しているのではないかと思います。私たちの活動が、今後も子どもたちの成長を支え、参加する会員のよき学びの場となりますことを念じて、島根大会開催のお礼とさせていただきます。

全体会

オンライン配信
８月25日（水）　島根県民会館

司　会

フリーアナウンサー
河野 美知

参加連合会紹介

全国高Ｐ連に加盟する各都道府県市高Ｐ連・協議会（50団体）を紹介（オンライン配信のみ）

島根県立松江商業高等学校吹奏楽部　アトラクション

[演奏曲]

「星影のエール」
「川の流れのように」
「Ｓｅｐｔｅｍｂｅｒ」
３曲を演奏し、会場を和やかな雰囲気に包んだ。

開　会　式

開会の辞

島根大会実行委員会

副会長　飯　塚　大　幸

大会会長式辞

一般社団法人 全国高等学校ＰＴＡ連合会

会 長　泉　　満

２年分の思いを込めて、全国大会、島根大会、絆を紡ぐご縁づくりの始まりであります。本会70年の歴史の中で、初めての延期大会、ウェブ開催へとご理解とご協力をいただきました全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

また、本日、ご公務大変お忙しい中、島根県知事丸山達也様、松江市長上定昭仁様、安来市長田中武夫様をはじめ、多くのご来賓の方々にご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。また、萩生田光一文部科学大臣には、ビデオメッセージをいただいております。誠にありがとうございます。

本大会は２度目の東京オリンピック・パラリンピックと同じ、2020年の開催予定でありました。その 2020 東京オリンピックも本年に延期されましたが、皆さんはどのような視点で観戦されたでしょうか。世界最高峰のアスリートたちの競技も感動と驚きの連続でありました。私自身は、自分自身のなりわいが設計ということでもありますので、人ではなく、物、建物、国立競技場というものを、その建築物をクローズアップさせていただきました。今回と同じ場所にあった旧国立競技場は、1964年の東京オリンピックメインスタジアムとして増築、改修され、まさに1960年代の高度経済成長を象徴するものでありました。このたびの2020東京大会で造られた２代目国立競技場のコンセプトは、成長拡大ではなく、謙虚さと人の親密さ、優しさ、日本らしさを表現するものであると位置づけられています。日本が誇る最先端の技術と、日本独特の和の象徴である木材をあらゆる場面で使用したこと、特に日本家屋の特徴である軒やひさしは47都道府県から調達した木材を、それらの都道府県の方位に向けて配置され使用されています。まさに多様性と調和のコンセプトにふさわしい、和の心を紡ぐものであり、旧国立競技場が時代のシンボル的存在であったように、謙虚で優しさ、理性を表現する新競技場は、コロナ禍であらゆるものが激変する日本の新たな基点としての象徴にきっとなるはずであります。日本各地で生まれ育った木材で作られた軒やひさしの連続した水平ラインと深い陰影、柔らかな影が神宮の森の木と調和している様子は、違ったものを認め、調和しながら共につくり上げていく、まさにＰＴＡのこれからを示しているように感じてなりません。コロナ禍で社会が激変する中、当たり前が当たり前でなくなる。疑問に思わなかったことが課題に。あらゆる常識が聖域なく変化していく。このような複雑な時代だからこそ、ＰＴＡの底力が求められているのではないでしょうか。

本大会のテーマは「ご縁（えん）づくり～新たな明日への礎のために～」であります。全国各地から新たな様式でつながる全ての皆様と、このデジタルご縁を基点とし、未来のＰＴＡの礎をつくり上げましょう。ここ神の国島根県に、全国からよろずの神が集い、あらゆるご縁、これを話し合う神秘の地において、デジタルを最大限駆使した大会を開催することの意義を、ぜひ皆さんに体験していただきたいと思います。本大会に新たな様式で参加される皆様が、この能動的な学習を通して多くの学びと気づきを得て、今後の持続可能なＰＴＡ活動に生かしていただくよう祈念を申し上げまして挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

ビデオメッセージ

文部科学大臣

萩生田　光　一 様

皆さん、おはようございます。

本日ここに、第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会が開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

皆様には、日頃からＰＴＡ活動を通じ、学校教育への支援、子供たちの健全育成のために多大な御尽力をいただき、誠にありがとうございます。また、新型コロナウイルス感染症への対応として、大変な御努力と創意工夫の下、新たにオンラインツールを活用した取組など、様々なＰＴＡ活動が進められていることに対しまして、感謝申し上げます。加えて、「全国高Ｐ連コロナ禍における教育活動・ＰＴＡ活動対応事例」として、各地のＰＴＡの取組を収集されるなど、精力的に活動されておりますことに御礼申し上げます。

我が国は、人生100年時代やSociety5.0の到来等、社会が大きく変革する中にあります。このような中、令和４年度から新しい高等学校学習指導要領が年次進行で実施されます。また、本年１月の中央教育審議会答申を受け、各高等学校の特色化・魅力化を図るためのスクール・ポリシーの策定や普通科改革、通信制課程の質保証等、新時代に対応した高等学校等の教育改革を進めているところです。

文部科学省としては、全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現に向け、これからもしっかりと取り組んでまいります。

子供を取り巻く環境が多様化・複雑化する中、学校のみならず社会総がかりでの教育を実現することが必要となっています。皆様におかれましては、コミュニティ・スクールや地域学校協働本部などと連携し、学校・家庭・地域の連携・協働を牽引いただくとともに、学校教育の良き理解者として、今後とも、御理解とお力添えをいただきますようお願いいたします。

結びに、今回の大会が実り多いものとなりますことを期待いたしますとともに、一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会のますますの御発展と、皆様の一層の御活躍を祈念申し上げ、私の挨拶といたします。

令和３年８月25日

文部科学大臣　萩生田　光一

来賓祝辞

島根県知事

丸　山　達　也様

ご紹介いただきました島根県知事の丸山でございます。本日は記念すべき第70回の全国高等学校ＰＴＡ連合会大会島根大会が、全国の会員の皆様をオンラインでつないで盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げますとともに、歓迎を申し上げます。

本大会は、昨年の新型コロナウイルス感染症の拡大を受けまして、１年延期され今年の開催に至ったという経緯があります。このたびの開催では、全国の皆様には大会史上初めてとなるオンラインでご参加をいただいております。そして、こうしたハイブリッド型の開催ということで、大会の準備に当たられました全国高等学校ＰＴＡ連合会の泉会長様、また大会実行委員会の大屋会長様をはじめ、関係の皆様方のご尽力に心から敬意を表するところであります。

さて、島根県は昨年延期になりました全国植樹祭をこの５月下旬に開催させていただいたところですが、２年越しで大会の準備をされた皆様方のご心労、ご心痛、またご苦労というのはいかほどであったかというふうに拝察しております。そしてＰＴＡの皆様方には、コロナ禍ということで、ご家庭や学校の負担が大変増す中、それぞれの地域で子どもたちの健やかな成長と学びを支えて、学校と地域をつなぐ重要な役割を日夜担っていただいておりますことに、心から敬意を表する次第です。

島根県におきましても、自分の人生と地域や社会の未来を切り開くために必要となる「生きる力」を育むために、学校や家庭、地域が目標を共有して、協働を図りながら、島根らしい魅力ある教育を進めているところです。子どもたちには、変化に対応できる「生きる力」を求めてきたところでありますが、現在のコロナ禍というのは、大人が予期しない変化にいかに対応していくかということを、子どもたちに我々の背中を見せる大事な機会だとも思って取り組んでおります。

本大会のテーマは、「ご縁（えん）づくり～新たな明日への礎のために～」となっております。基調講演、そして６つの分科会で、喫緊の課題でありますコロナ対応、またＳＤＧｓ等、従来から掲げておられます学校、家庭、地域が抱える課題について、それぞれ議論を深めていただく予定となっております。特に今の状況は、全国的にも緊急事態宣言地域や、まん延防止等重点措置地域が追加されるという感染拡大のさなかであり、高校によっては夏休みが終わり２学期が始まるこの時期は、感染拡大が進んでおりますデルタ株、第５波をいかに家庭や学校に持ち込まないかということが、喫緊の課題となるタイミングではないかと思います。全国各地で政府、都道府県、市町村一体となって取り組んでおりますが、我々といたしましても、この状況をよくよく注視し、学校、家庭の皆様方のご協力をいただきながら、この難局を乗り切っていかなければいけないと意を強くしているところです。

本日リモートでご参加の皆様方には、このコロナ禍を乗り越え、全国との往来が安心してできるタイミングになれば、ぜひ島根県にお越しいただきたいと思います。島根県には縁結びで有名な出雲大社、そして国宝の松江城、世界遺産の石見銀山や隠岐のユネスコ世界ジオパークなど、豊かな自然や古き良き文化、歴史があります。また美肌の湯をはじめとした豊富な温泉や日本酒、ソバ、シジミなど、美肌効果の高い素材もたくさんそろっています。皆様のご来訪をお待ちしています。

これから本当に正念場を迎える２学期、特に高校３年生の方にとりましては進学、就職を控えた大事な時期ということで、大変重みがある時期を迎えます。本日のこの大会の成果を実り多いものとされ、それを活かして学校、家庭、地域がますます発展されますとともに、全国高等学校ＰＴＡ連合会、また会員の皆様方のますますのご発展、ご活躍を心からご祈念申し上げまして、甚だ粗辞でございますけれども、開催地を代表いたしましてのご挨拶、お祝いとさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

来賓祝辞

松　江　市　長

上　定　昭　仁様

全国高等学校ＰＴＡ連合会大会島根大会のご開催、誠におめでとうございます。開催地である松江市を代表しまして、一言ご挨拶申し上げます。

ここ松江市は、宍道湖と中海という２つの湖、そして日本海に抱かれた風光明媚な水の都です。皆さんは、この地を愛した明治時代の文筆家、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）をご存じでしょうか。本日、この後、小泉八雲のひ孫である島根県立大学の小泉凡先生が記念講演もされると聞いております。

小泉八雲は松江を愛し、「耳無し芳一」や「ろくろ首」などの怪談を含む日本の文化を世界に広めた立て役者です。また同時に、「オープンマインド」という精神を唱えました。この「オープンマインド」とは、一人ひとりの違いや異文化、新しいアイデアや多様性を受け容れて、偏見や先入観を持たずに物事を捉えることを指します。今、変化の早い先行きが不透明な世の中において、我々に必要な考え方であると認識しています。また、「誰一人取り残さない」という「ＳＤＧｓ」の概念にも完全に合致するものです。今、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、出口が見えず、非常に難しい状況に世界も日本全国も置かれています。こうした状況だからこそ、皆が一致団結して難局を乗り切るだけでなく、この苦難を克服して、さらに強い世の中、社会にしていくことが求められています。

ここ島根県東部は「出雲地方」と言われます。旧暦の10月のことを「神無月」と呼びますが、出雲地方だけは「神在月（かみありづき）」と称されます。それは、全国から10月に八百万（やおよろず）の神、800万の神様が出雲大社に集い、世の中の縁結びについての会議をするためと、古くから言い伝えられています。ＰＴＡ連合会の皆さまには本大会のメインテーマである「ご縁づくり」を縁結びの出雲の地において実践いただけることを嬉しく思います。そしてコロナ禍を乗り越えて、未来に歩みを進めていく、大きな機会になるものと期待申し上げまして、私からの祝辞とさせていただきます。

来賓紹介 (グラビアページ参照)

島根県知事	丸山　達也様	出雲市教育委員会教育長	杉谷　　学様
松江市長	上定　昭仁様	島根県教育委員会教育長	野津　建二様
安来市長	田中　武夫様	島根県教育庁社会教育課長	野々内　昭浩様
雲南市副市長	吉山　　治様	島根県公立高等学校長協会会長	常松　　徹様

表　彰　式

全国高Ｐ連会長表彰（個人・団体）

個人74名・団体74団体を代表して

島根県立松江工業高等学校前ＰＴＡ会長

野々村　卓也 様

全国高Ｐ連役員等表彰者

40名を代表して

全国高等学校ＰＴＡ連合会前会長

牧 田　和 樹 様

第69回全国大会開催地に対する特別感謝状受賞団体

京都府立高等学校ＰＴＡ連合会 様
京都市立高等学校ＰＴＡ連絡協議会 様

２団体を代表して

京都府立高等学校ＰＴＡ連合会会長

鈴 木　良 彦 様

第69回全国大会開催地実行委員会に対する特別感謝状受賞者

第69回全国高Ｐ連大会京都大会実行委員会委員長

奥 野　貴 史 様

お礼のことば

受賞者、受賞団体を代表して

一般社団法人 全国高等学校ＰＴＡ連合会

前会長　牧 田　和 樹 様

今ほどは表彰をいただきまして、本当にありがとうございます。とても嬉しいのでありますが、加えてこの島根大会の開催が何よりも嬉しいのであります。というのも、島根大会の開催延期を決めたときの会長で、その後を泉会長に託し成り行きを見守っていたわけですが、コロナ禍の影響を考慮してのハイブリッド開催として、全国の加盟校へはオンラインで配信するという素晴らしい取り組みをいただいたお陰で、ようやくここまでたどり着けたこと、本当に前会長としても嬉しく思っております。泉会長をはじめ、全国高Ｐ連の皆さん、そして何よりも主管をしていただいております大屋会長、勝部事務局長率いる島根県高等学校ＰＴＡ連合会の皆様に、心より感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

私のＰＴＡの始まりは 1999 年、上の子どもが小学校２年生のときでした。以来 21 年、全国高等学校ＰＴＡ連合会の会長を終えるまで、ずっとＰＴＡ活動の中枢に携わってまいりました。お陰さまでいろいろな経験をさせていただきましたが、とりわけ全国高Ｐ連の活動に入ってからは、いろいろな方々との交流といいますか、自分自身の知見を高める機会をいただきました。

一つご紹介をさせていただくと、今般、話題になりました大学入試改革の文部科学省の委員をさせていただきましたし、それから新しい高校の在り方の中教審の臨時委員もさせていただきました。その過程で、文部科学省の方々との意見交換や、そこに参加されていらっしゃる委員の先生方の意見を拝聴させていただくことで、現代の教育の課題というものを如実に知ることができました。

今ＰＴＡの活動に携わっているわけではありませんが、今後もライフワークとして教育という分野に関わっていけたらいいなと思う次第であります。ＰＴＡが一時、生涯学習の範疇に入った時期があります。最近は地域連携のカテゴリーに入っておりますけれども、やはりこういうことを通じて、ＰＴＡというのは学べる場なのだということを改めて認識した次第であります。どうか全国の高Ｐ連に関わっている皆様方、ぜひそういう学びの場としてのＰＴＡも楽しんでいただけたらいいのではと思っております。

最後になりますけれども、これまでいろいろＰＴＡでお付き合いをいただき、そしてまたご支援もいただきました皆様方に心より感謝を申し上げ、そして、私の活動を陰で支えてくれた家内、何よりもこのＰＴＡ活動に参加するきっかけをつくってくれた２人の子どもに感謝をし、ご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

閉式の辞

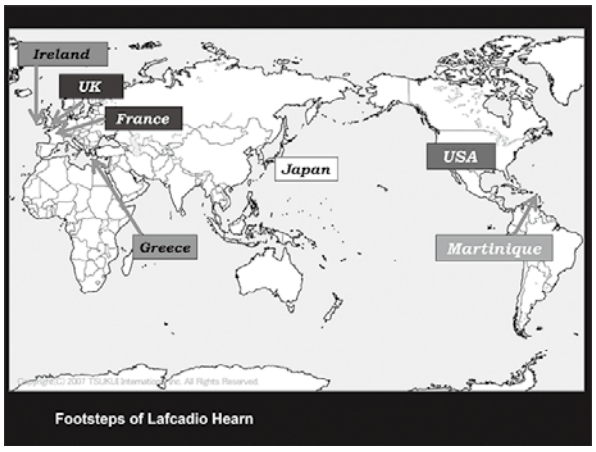
島根大会実行委員会　副会長　飯 塚 大 幸

記念講演

小泉八雲記念館

館　長　小 泉　凡 様

演　題　「小泉八雲がみた日本の魅力
～五感でとらえた日本のすがた」



皆さん、おはようございます。小泉凡と申します。今日は第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会の大会の開催、誠におめでとうございます。

これから小泉八雲朗読のしらべ公演に先立って、まず、私のほうから少し小泉八雲に関するお話をさせていただきます。私の曽祖父に当たる小泉八雲は、ちょうど今から130年ほど前にこの松江に443日間滞在しました。先ほど上定市長さんからのお話にありましたように、偏見をあまり持たずに、他者への公平で愛のあるまなざし、「オープン・マインド」を持って、また五感を研ぎ澄ませながら松江の日々を送っていました。松江で発見した「明治日本の姿」が彼の日本文化の理解にとって大きな意味を持つことになったと思います。今日はこれからそのことについて、少しお話をさせていただければと思います。

では、スライドをご覧いただきながらお聞きいただきたいと思います。ラフカディオ・ハーン、小泉八雲は、ご覧のとおり地球を半周以上回って40歳のときに松江にやってまいりました。ギリシャで生まれてアイルランドで育ち、そしてイギリスとフランスで教育を受けます。19歳で単身、移民としてアメリカへ渡る前後、赤貧の暮らしを経験しますが、アメリカで何とかジャーナリストになります。シンシナティとニューオリンズで仕事をし、さらにその後は人類学者的な関心を持って、

カリブ海のフランス領の島、マルティニークで２年間を過ごします。それからニューヨークへ戻って日本へやってきます。39歳の時です。

日本では最初、横浜でしばらく生活しますが、その後、松江、熊本、神戸、東京と移り住んで54年間の生涯を東京で終えています。生涯で約30冊の単行本を残しました。紀行文や、再話文学と言われる怪談に文学的魂を吹き込むような、そういった文学形態を得意としていました。

では、八雲の生涯を簡単にご紹介したいと思います。これが八雲の生まれたギリシャの島、レフカダというところです。ラフカディオという名前も、ここから来ています。松江の風景をご存じの方は、松江と似た「潟の風景」だと思われるかもしれません。レフカダも松江も、八雲の言葉で言うと、「ヴェイパートーン」（Vapour tone）で、霧に包まれたような、そういう湿度の高さを感じる風景なんですね。でも、八雲は松江の水景に見出した「陰」を非常に喜んだのだと思います。

そして、物心ついたときにはアイルランド、ダブリンにいまして、この家では不思議な体験をしています。きまって冬場に逗留するジェーンという女性の亡霊の幻視体験です。「ジェーン！」と呼びかけると彼女が振り向いてくれたけれども、その顔は何とのっぺらぼうだったのですね。八雲は気絶して、２階から階段を転げ落ちてしまいます。そして、アイルランドは何といっても妖精の国です。八雲には乳母のキャサリン・コステロという人がいました。水木しげるさんで言えばのんのんばあに当たる人で、彼女が妖精の話や怪談話をたくさん聞かせてくれたことが「怪談」へ興味を持つきっかけとなりました。

そして学校時代、北イングランド、ダーラムにあるセント・カスバートという神学校で学ぶのですが、そのときに大きなカタストロフィーを体験します。遊戯中の事故で左目を失明してしまうのです。さらに養育者の大叔母が破算し、学校を退学しなければならなくなりました。その後、ロンドンに移り放浪生活を送ります。ただ、これによって一段と八雲の五感力は研ぎ澄まされていったのだと思います。同時に底辺の暮らしへの温かいまなざしが芽生えていったのではないかと思います。

そして、19歳で単身アメリカへ渡ります。最初、シンシナティという中西部の町で暮らします。何とか24歳でジャーナリストになりますが、そのとき恋に落ちた女性がマティ・フォリーというもと黒人奴隷だった女性でした。当時オハイオ州の法律では、有色人種と白人の結婚は認められていませんでした。でも、八雲は

そういった人種差別主義者ではありませんでしたので、あえて法にまで挑戦して結婚を断行します。それがスキャンダルになってしまい、結局この町に住みにくくなってしまうのですが、現代、逆の意味でブラック・ライブズ・マターあるいはＳＤＧｓという観点から、そのことが評価されるようになりました。今年の２月26日付のワシントンポストの一面に、小泉八雲のことが紹介されました。その紙面に出ている若い女性の玄祖母（彼女の祖母の祖母）にあたる、ヘンリエッタという人が、奴隷解放後に、白人からのひどい仕打ちで苦悩をわずらいます。それで訴訟を起して、時間をかけて勝訴するわけですが、そのことを書いた古い新聞記事が家の中から見つかったと。何とその記事を書いたのは26歳のラフカディオ・ハーンだったのです。そしてワシントンポストは、こんな早い時期に奴隷制度と自由に関する彼女の貴重な体験を新聞の紙面で共有したことに敬意を表しているのです。

その後、八雲は、ニューオーリンズへと移っていきます。ニューオーリンズ、大変面白い町ですよね。フランスの文化とアフリカの文化、そして先住民の文化が混交したクレオール文化が花開いた町です。八雲はクレオール文化に魅了されつつ、同時に日本との出会いを果たします。1884年から1885年にかけて、ニューオーリンズで万博が開催され、八雲は日本のパビリオンの取材に行き、日本への魅力を感じ始めるのです。

さらにこの後、カリブ海のマルティニークで２年間、人類学者のような仕事をしますが、この写真の何枚かは八雲が自分自身で撮ったものだと思われます。私の東京の実家で35年ほど前に、鳩サブレーの古い缶の中から見つかった写真です。日本までわざわざこの写真を持ってきたということは、非常にこの島に思い入れが深かったことが想像されます。マルティニークの熱帯の自然、クレオールの文化環境の中でもやはりオープン・マインドが熟成されていったのだと思います。

そして、ニューヨークへ戻り、B.H. チェンバレンが英訳した『古事記』を読みます。そして、ますます日本へ惹かれるようになっていきます。英訳『古事記』は、本を開くと神話マップがついていて、その一番目立つところに「イズモ・レジェンダリー・サイクル (Idzumo Legendary Cycle)」、すなわち「出雲神話群」という文字が見えます。

恐らくこの地図を見て、「出雲」というところに行けば日本文化の古層が理解できるに違いない、とハ雲は考えたのだと思います。そして、自分で日本取材の企画書をハーパー社に持ち込み、特派記者として日本へ来ることになります。

もちろんハーパー社としては、記事を書いたらすぐアメリカへ戻ってくるということで契約を結んでいたわけですが、ハ雲は横浜に到着するや否や、しばらく自分はこの土地で暮らしたいと考えるようになります。では、どのように日本で仕事を見つけたかというと、ニューオーリンズで出会っていた文部省の服部一三や、『古事記』の翻訳者チェンバレンの紹介で、幸運にも空席ができた松江の島根県尋常中学校への赴任が実現したのです。これは本人にとっても本当に幸せなことだったと思います。

そして、まず松江という町で何に感動したかというと、「松江の音の風景」なのです。松江の一日の始まりと終わりを、ハ雲は『知られぬ日本の面影』という代表作の中で、耳で描いたのです。米つきの音から始まって、洞光寺の鐘の音、地蔵堂のお勤め、そして朝日に向かってかしわ手を打つ当時の松江の人々の様子、そして松江大橋を渡る下駄の音、その音も、朝は大舞踏会の音に聞こえ、夜は滝の轟きのように聞こえると言っています。夜にはまた違う音が展開します。恋の辻占、夜鳴きソバの呼び声、そして同時に自然の音、特にカエル、セミ、ヤマバト、こういった生き物の声をハ雲は愛でていました。風景というのは目に見える風景だけではなくて、音の風景もあるということをハ雲は言っています。

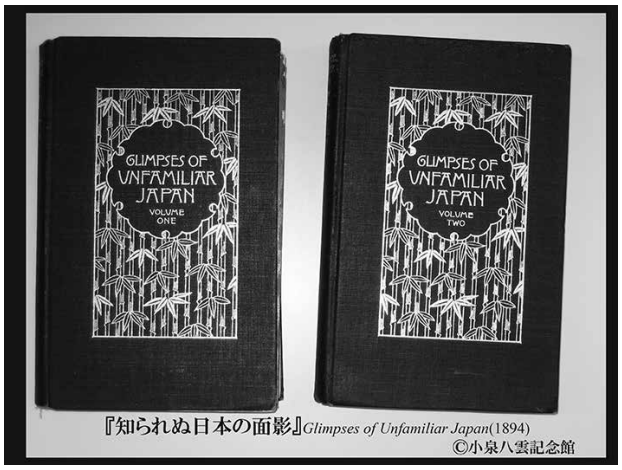
同時に、これは当時の一般的な西洋人が持っていた音楽観、すなわち西洋のクラシック音楽だけがミュージックで、それ以外はノイズだという考え方への反発でもあったように思えます。ちなみにチェンバレンには、『日本事物誌』という日本についての百科事典のような著書があります。その中でこう解説しています。「もし音楽というあの美しい言葉をやむなく引きずり降ろして、東洋人が漫然と弦を爪弾いたり、声をきーきー張り上げて歌ったりするようなことまでその意味内容に含めるとすれば、神話時代この方、日本にも音楽が存在したと考えられる」と。ハ雲は松江から早速抗議の手紙を出して、「私はむしろ原始的な音楽に魅了されてきた」ことを告白するのです。

そしてハ雲が松江で得たもうひとつの感動は、宍道湖の落日です。この中に「陰と移ろい」という日本的な美を見いだしたのです。熱帯地方の夕日に見慣れてきたハ雲にとっては、全く違う夕日の風景だったのです。夢の中に差す光かすむような淡い色合い、優美で地味な色彩、言葉にできないほどの柔らかい色、そしてそれが5分ごとに変わっていく。「陰と移ろい」を見いだしたことは、やはり日本文化を探求する上で、大きな発見だったのではないでしょうか。じっさい、陰も移ろいも日本文化を解くキーワードだと認知されています。

さらに松江では超自然をテーマとする物語すなわち怪談にも関心を示します。特に松江で聞いた怪談の中で最もハ雲が共感したのは、この大雄寺に伝わる「飴を買う女」の話ではなかったかと思います。早まって葬られた母親が墓の中で出産をする、そして幽霊になって水あめ

を買い、子育てをするというお話です。この怪談を語ったのは、後に八雲の妻となる小泉セツだと思われます。松江の豊かな民間伝承の中で育まれたセツは語り部でもありました。八雲の再話文学の作品群は、この人の支援なくしては全く達成できなかったといえるでしょう。

石巻南浜地区(2011年4月下旬)



『知られぬ日本の面影』*Glimpses of Unfamiliar Japan*(1894)
©小泉八雲記念館

そして、「飴を買う女」の話の最後に、八雲は「愛は死よりも強し」(Love being stronger than death)という一言を付け加えて再話したのです。八雲は、これこそがこの怪談が伝える「真理」(truth)だと考えたのでしょう。八雲は後年、東大の学生に向かって、「怪談と純文学と比べて怪談が劣っていると思ったら大きな間違いだ、怪談には必ず一面の真理(truth)があるのだ」と言っています。真理とは、おそらく時空を超えて変わらない本当のことが含まれているということだと思います。八雲も４歳で母、ローザと生き別れていますので、母への哀惜の念が非常に強かったのです。

私自身、そのことを実感したのは、東日本大震災の後１か月後に石巻に行ったときでした。石巻にも八雲の愛好者の会「みちのく八雲会」があって、全員の方が被災されました。食糧を持ってお見舞いに訪れた時のことです。一番被害がひどかった南浜地区に連れていかれて、あなたが来る少し前にここで若いお母さんの遺体が発見されたという話を伺いました。そのお母さんは、何と赤ちゃんを抱き締めたまま瓦礫の中に埋もれていた。それを知った石巻の市民が涙を流したということでした。その時、「母の愛は死よりも強い」という事実を眼前で受けとめ、身が震える思いでした。本当に時空を超える真理なのだと実感しました。八雲はそのようにして一つひとつの伝承怪談を大切に再話していったのです。

超自然の世界から多くを学んだ八雲ですが、実は感染症からも多くを学んだ人でした。34歳の時フロリダでマラリアに、37歳のときにマルティニークで腸チフスにかかり、生死をさまよう体験を２度ほどしています。そして、感染症に関する記事や作品も少なくとも６つ残しています。ただ、その中で八雲が描いているのは、家族や血縁を超えて救いの手を差し伸べる人間の底抜けの勇気と優しさでした。非常事態だからこそ発揮される人間のむしろプラスの側面を描いているのです。また、ご興味があれば、ぜひ、「天然痘」(『仏領西インドの二年間』)などの作品を読んでいただければうれしく思います。

感染症も怪談のテーマである妖怪も人間の恐怖と不安の対象という点で共通します。八雲はその両者から人間中心主義への反省を学んでいたのです。

最後に、今日は教育関係者の方が多くいらっしゃると思いますので、八雲の教育観について、少し触れさせていただきたいと思います。小泉八雲は39歳で日本に来るまで、教師をしたことは一度もありませんでした。でも、その割には日本で尋常中学校、師範学校、旧制高校、大学でも教えて、生徒と非常によい関係を築くことができたのではないかと思います。日本の教育内容や教育水準の高さにまず驚嘆し、非常に高く

評価します。それから生徒の向学心、生徒の態度、そして教師と生徒のすばらしい信頼関係、こういうものを称賛しています。

しかし同時に、日本の教育への懸念も示しています。遡って、最初に八雲が教育について語るのは28歳のときです。シンシナティで「教育における想像力の価値」という記事を書いていますが、その中で「最良の作者や教師は無味乾燥な事実を想像のスパイスで味つけする人だ」と、教師の定義をしています。「想像力を育む人」という意味で、八雲にとって、作家も教師も同じ定義だったのかもしれません。松江に到着して約２か月後に、八雲は島根県教育会の依頼を受けて「想像力の価値」のテーマで講演をしています。その中で、「日本では残念ながら、記憶力は想像力を借りずに育めると誤解している人が多い」と述べています。すなわち記憶力偏重の教育がなされていることを懸念しているのです。

そして、最晩年、亡くなる半年ほど前のことです。当時は新宿区の西大久保に住んでいました。そこにある大久保小学校で保護者向けに講演をしています。「西洋と日本の家庭教育」というテーマでした。その中で、一つは、「日本の保護者は学校の教師に頼り過ぎていないか」ということを言っています。それから、「学校でも家庭でも詰め込み式の勉強をさせ過ぎる」ことが気になると言っています。いずれにしても、学校と、それから保護者と地域が、一層深い絆で結ばれて、未来の日本を担う子どもたちを育んでいかなければいけないなということを、八雲は思っていたようです。これについては、私自身も共感するところです。

それでは、これから小泉八雲朗読のしらべを楽しんでいただきますけれども、これは2007年から行われていて、俳優の佐野史郎さん、ギタリストの山本恭司さんが小泉八雲の世界を朗読と音楽で表現するというパフォーマンスで、松江にとっては文化資源であり、また総合芸術でもあると思います。世界の小泉八雲ゆかりの地も含めて、もう60回以上公演を行っています。本日は、八雲の代表作のひとつで、山陰地方を描いた出色の紀行文、『知られぬ日本の面影』の中から、主に聞いていただきたいと思います。

そして、ここで皆様にお伝えしなければならないことがあるのですが、今回、俳優の佐野史郎さんが残念ながらライブ出演を断念なさいました。佐野史郎さんからメッセージを預かっておりますので、私のほうで読ませていただきます。

◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆

「本日は第70回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会島根大会の開催おめでとうございます。コロナ禍にあっての無観客、オンライン開催となってしまいましたが、最後まで実りある時間となりますことを願っております。さて、私どもは、長年、松江市の主催により、小泉凡さんの監修の下、ギタリストの山本恭司とともに小泉八雲朗読のしらべを続けてまいりました。私と山本恭司は、松江がふるさとで高校の同級生であります。松江の空気を体いっぱいにお届けできれば幸いです。小泉八雲といえば怪談で知られていますが、本日はその松江をこよなく愛した小泉八雲の作品の中から、松江や山陰の怪談を中心にお届けしたいと思います。本来ならば私も松江に帰り、全国の皆様にリアルタイムで神話の国の魅力をお届けしたいのですが、今回は以前収録した公演からご覧いただきます。実は、先日まで２か月ほど入院生活を送っており、このステージをお届けするお約束ができないでおりました。また、コロナ禍ということもあり、大変申し訳ございませんが、本日はライブでの出演は控えさせていただきます。失礼とは存じますが、何とぞご理解のほどをよろしくお願い申し上げます。それでは、最後までじっくりと松江からの小泉八雲の世界をお楽しみいただきますよう。令和３年８月25日　佐野　史郎」

◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆ ◇ ◆

ということで、これから映像になりますが、小泉八雲朗読のしらべをお楽しみいただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

記念公演

俳　優

佐野 史郎 様

ミュージシャン

山本 恭司 様

小泉八雲朗読のしらべ「八雲彷徨～神々の国の首都 松江から」

【プログラム】
- 「夏の日の夢」より
- 神々の国の首都
- 飴を買う女
- 鳥取の布団の話
- 露のひとしずく
- さようなら

山本恭司 氏 ソロライブ

記念講演・公演お礼

島根大会実行委員会

副会長

前 澤　信 也

全体会

オンライン配信

8月25日(水)　島根県民会館

島根県立浜田商業高等学校 郷土芸能部　アトラクション

［演 目］大蛇

リズミカルなお囃子に乗って舞う、勇壮な須佐之男命と大蛇に、会場は華やかな雰囲気に包まれた。

閉　会　式

開会の辞

島根大会実行委員会

副会長　今　岡　正　和

全国高Ｐ連旗返還・授与

島根大会実行委員会大屋光宏会長から全国高Ｐ連泉満会長へ

全国高Ｐ連泉満会長から次期開催県石川県高Ｐ連村井繁夫会長へ

次期開催地挨拶　石川県文教会館より生中継

石川大会実行委員会

委員長

粟 田　真 人様

全国の皆さん、こんにちは。来年の石川大会の実行委員長を務めます粟田真人と申します。

まずは、島根大会実行委員会の大屋会長をはじめ、島根県高Ｐ連の皆様、準備から運営まで、大変お疲れさまでした。過去に例がなかった大会の順延、そして無観客、オンラインでの開催は、私たちが想像する以上に大変だったと思います。参加者の一人として、心よりお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

来年の全国大会は石川県で開催いたします。大会メインテーマは「輝く未来への礎」、サブテーマは「親から始める新時代の教育」に設定しました。子は親の鏡と言われるように、私たちが未来に悲観的だと、子どもたちも悲観的になってしまいます。ですから、子どもたちに未来が明るいと思っていただくためには、まず、私たち自身が未来は明るいなと実感することが輝く未来への礎となり、それが新時代の教育ではないかという意味を込めさせていただきました。

石川県は東西文化をつなぐ回廊として発展してきた加賀と、里山、里海と言われる豊かな自然に恵まれた能登からなり、様々な地域の人々の結びつきによって、本県独自の文化を創造してきました。このように、出会いこそが文化と言える石川の地で、全国のＰＴＡ会員が３年ぶりにお会いできることを楽しみに、石川県高Ｐ連加盟校42校が一丸となって準備を進めているところです。

最後に、石川大会実行委員会のメンバーから、全国の皆さんへのメッセージをもって御挨拶とさせていただきます。

「島根の皆さん、困難な状況の中での全国大会の開催、ありがとうございました。」

「石川大会のテーマは、輝く未来への礎、現在、分科会を中心に議論を重ねています。皆様、楽しみにしていてください。」

「全国の皆さん、石川県は縦に長く、北は日本海から南は日本三名山白山まで広がっております。能登、金沢、加賀は、それぞれ四季折々の豊かな風土です。石川の歴史、文化、食が皆さんをお迎えいたします。」

「全国の皆さん、石川大会にお越しください。」

「金沢にきまっし。」

「能登にこんかいね。」

「加賀においでよ。」

閉会の挨拶

島根大会実行委員会

会　長

大　屋　光　宏

島根大会の実行委員会の会長を務めさせていただきました大屋光宏です。皆さんのおかげをもちまして、無事、大会旗を石川県に引き継ぐことができました。本当にありがとうございます。

思い起こせば、まず、島根県内の会員の皆さんにおきましては、約７年近い準備となりました。その年度の現役の会員で準備を行って来ましたので、36校、約１万5,000人の会員は、その都度その都度メンバーは代わりましたが、その時々の一人一人が自分のこととして心配をしていただき、準備に携わっていただきました。そして、その思いを次の会員の皆さんに引き継ぎ、本日を迎えることができたと思っております。

言うまでもなく、コロナ禍で大変なときでした。島根県をはじめ、行政の皆さん、ＴＳＫをはじめとする業者の皆さん、そして本日お越しいただきました泉会長をはじめとする全国高等学校ＰＴＡ連合会の役員の皆さん、ともに活動をしてきました中四国の連合会、そして全国の連合会の会員の皆さんから、本当に多くのご支援とご指導、そして応援をいただいたことが力となって本日を迎えることができたんだと思います。関わっていただいた皆様に、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

こうやって大会を開催してみますと、小泉凡先生の講演の中でもありましたが、想像力という言葉がありました。一堂に会して行う全国大会に比べますと、どうしても足りない部分もあるのかなと思います。仕事の都合をつけて、日程を組み、大会に参加する、そしてその場で多くの人たちに出会う、参加した人が、他の人々が学ぶ姿を見ることによる、そこに生じます感動であるとか、共感であるとか、学ぶ意欲であるとか、そして見たもの、聞いたもの、学んだことから生み出される想像力、こういうものは足りなかったのかなと思います。ぜひともこの大会、分科会等を視聴していただいた後は、コロナが終息したときには、ぜひ島根に来ていただいて、足りなかった部分を補っていただければと思います。

毎年、島根にはしまね留学ということで、県外から高校３年間を島根県で過ごすということで、200人近い生徒がやってきます。私たち地元にいる人間、親にとっては、気がつかない部分が島根にあるのかと思います。どこの県もどこの地域も同じかとは思いますが、いにしえより伝わる文化、歴史、美しい景観、豊かな自然、これに触れることによって生まれる想像力は、かけがえのないものだと思っています。関わった皆さんがきっと思いは同じだとは思いますが、今、私たちがしなければいけないこと、伝えなければいけないことは何であるのか。大会テーマでも島根県でも礎という言葉を使ってます。石川県も使われます。きっと今の厳しい状況を乗り越え新たなものをつくりだし、次の子どもたちのために引き継ぎたいという思いだと思ってます。

今回の島根大会のもう一つの大きなテーマはご縁という言葉を使っています。あらゆる場面で関わることによって多くのご縁が生まれたことと思います。非常に厳しい時代ではありますが、このご縁を力に代えて、会員の皆様が日々過ごしていただければと思います。

本当に最後にはなりますが、コロナ禍で大変な思いをされている人々、心を痛める場面も多かったと思います。８月に入り、台風、長雨と非常につらいこと、そして受け入れ難い現実を目の当たりにする場面も多かったことと思います。今回の大会により育まれましたご縁が、少しでも皆様の生きる力、明日への希望へつながればうれしく思います。

大会に関わっていただいた皆様、そして全国高等学校ＰＴＡ連合会の会員の皆様のご多幸と今後のご活躍を祈念いたしまして、お礼の挨拶といたします。大変ありがとうございました。

閉会の辞

島根大会実行委員会　　副会長　今　岡　正　和

分科会

オンライン配信
8月25日(水)　14:00～

アトラクション

司　会

フリーアナウンサー 森山 悟子

録　画

8月11日㈬
松江プラバホール

島根県立江津高等学校　神楽愛好会

［演　目］八岐大蛇

暴れる八頭の大蛇に立ち向かう須佐之男命は圧巻でした。

島根県立三刀屋高等学校　演劇部

［朗読劇］

長崎で自らも原爆に遭いながらも、被爆者を治療し続けた永井隆博士の平和と愛を物語る朗読劇には家族の尊さを感じました。

島根県立出雲農林高等学校　出農太鼓部

［演奏曲］

「新七兵衛太鼓」、「彩」

笑顔あふれて、楽しそうに全身の体をつかって太鼓をたたく姿は、若さがいっぱいでした。

分科会

オンライン配信
8月25日(水)　14:00～

第１分科会

企　画
株式会社 ベネッセコーポレーション

録　画　７月28日　さんいん中央テレビ

「Withコロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」～予測不可能な未来を生きていくには～

基調講演

講　師

株式会社 ベネッセコーポレーション
教育情報センター
センター長　谷 本　祐一郎 様

（講演要約）

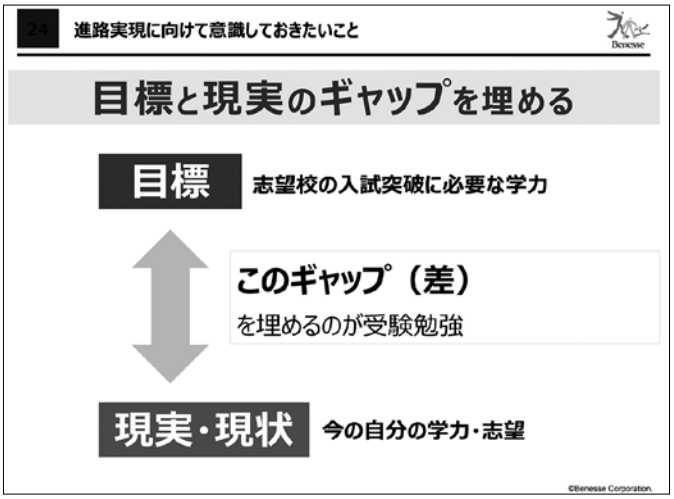
自分の高校時代は、野球漬け、部活三昧の３年間でした。始め良かった成績順位がテストごとに下がって高校を卒業するような結果となりました。大学も滑り込みセーフで合格しましたが、高校入試と大学入試は何が違うかっていうと、ライバルの数が圧倒的に違います。私の場合は岡山県の岡山市の中学３年生が高校入試におけるライバルでしたが、大学受験というのは、北海道から沖縄までの高校３年生プラスいわゆる浪人生という人たちが私のライバルになってきます。だから、全国の模擬試験を受けるっていうのは非常に価値があるのではないかと今は思っています。

この春行われた大学入試についてお話しします。特に国公立大学の後期日程においては、欠席率は年々上昇しており、前期に比べると募集人員も少なく競争としては厳しいですが、最後まで諦めないことで逆転合格が起きるのもこの後期の特徴です。

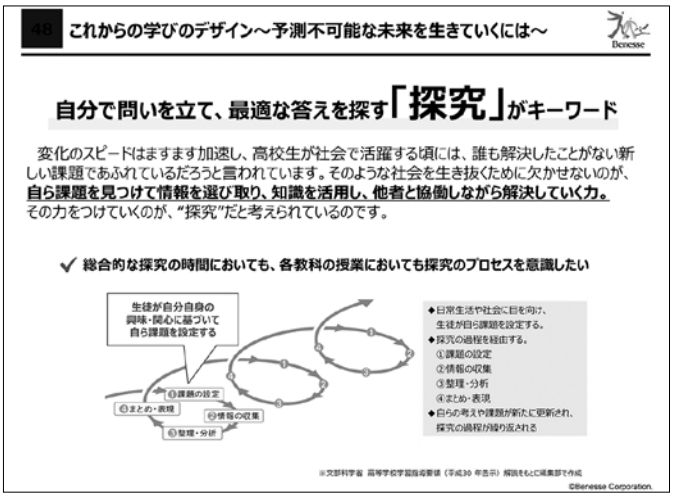
続いて、近年の入試概況についてお話しします。コロナ禍で国公立大では、理系の人気が高く文系の人気が低い、そういった傾向となっています。一方、私立大では文系、理系ともに大幅な志願者数の減少が見られました。人気の学問系統は、法学系統や工学系統であり、また保健衛生学系統、医学系統、薬学系統といった医療に関する系統も人気となっています。このコロナ禍で、命であったり、医療といったものにどう関わっていこうかといったことを高校生がより幅広い視点で考える、そういった形に１年間でなってきたのかなと思います。語学、国際関係学系統については、志願者数が大きく減少をしています。これはコロナの感染拡大の影響により、国をまたぐ人の移動の制限がかかっているところが大きく影響していると考えられます。私立大については、2016年度入試以降、大学が設定をしている募集人員を大きく上回る入学者を受け入れた場合、文科省からペナルティーを受けるということで、合格者数を絞り込み、入学定員があふれないようにする動きがありますが、志願者数の大

幅な減少により、そのことはあまり影響を受けていないように思います。

大学入学共通テストで何が変わったのかを整理すると、出題内容は、日常の物事を素材とした問題や探究活動の場面を取り上げた問題などが特徴的で、複数の資料を読み取り、情報を活用する力が多くの教科で重視をされています。このような傾向のなかでは、自分ができていないことを明らかにして、弱点を克服するために必要な学習を考えて実行し、丸暗記に頼らず、なぜそうなるのかといったプロセスを大切にしながら学習を行う、こういう学習スタイルが重要なポイントとなると思います。



よく講演会でも、受験勉強ってどうすればいいですかといった質問を受けます。受験生にはそれぞれ志望校合格に向けた目標があり、この目標と現実のギャップを埋めていくことが受験勉強だというふうに私は考えています。そのギャップを知る一つの機会が模擬試験です。模擬試験といいますと、どうしても判定、偏差値、全国順位、こういったところに注目しがちですが、ギャップを埋めていくということで考えると、実は得点に注目をしていくことが重要となってきます。



東京大学とベネッセ教育総合研究所の共同プロジェクトの一環で行っている2020年の親子調査の結果から、コロナ禍の中での生徒の状況を確認することができます。それによると、自分の学校が好きだと回答する割合が高まっています。コロナ禍で本当に様々な学校行事が中止となり、思うような学校生活が過ごせない中、これまでの当たり前が当たり前ではなかったのだということに気づいた高校生が多かったようです。よって、学校生活の１日１日を大切に過ごす、そういった高校生が増えたと先生方からも伺っています。総合型、学校推薦型選抜、いわゆる年内入試を利用したいという生徒の意向は強まっていましたが、大会や検定の中止によって、出願のための材料がそろわず出願を見送ったという声も先生方から伺いました。その一方で、実績がなくても、例えば部活動３年間の練習の中での気づきや、確かな志望理由、将来の展望があれば、面接で評価される、そういった気づきもあったという声も聞いています。

このコロナ禍は、先が見えない世の中でもありますので、社会への不安というものは当然、親子ともに高まってしかるべきだと思います。よって、志望動向において医療系の幅が広がっていることに代表されるように、どの大学に行くかではなく、どのように生きていくのか、どう社会と関わっていくのか、こういった志向に進路選択がシフトしてきているように感じています。

新教育課程の目的は、予測不可能な社会で必要な資質能力（知識・技能、思考・判断・表現力、学びに向かう力）の育成です。少し前まで、この予測不可能な社会というものがなかなかピンとこないと思われた方も多かったのですが、まさにこのコロナ禍そのものが予測不可能な社会です。来年度から高校に入学をしてくる生徒は、情報Ⅰが共通必履修科目となります。情報デザイン、プログラミング、データサイエンス、これが情報Ⅰの三本柱とも言われています。身近な課題解決につながるのがこの情報Ⅰであり、情報も失敗しながら前に進んでいく教科ですよとある先生から聞きました。これからの学校の授業は、自ら課題を見つけて情報を選び取り、知識を活用し、他者と協働しながら解決していく力をより一層意識しながら、展開されていくと思います。子どもたちもそれらの力を身につけ、この予測不可能な未来で活躍をしていくことになります。では、それはどのような授業なのでしょうか。そこのところを、これから三浦先生にバトンタッチをして模擬授業という形でご体感いただこうと思います。どうもありがとうございました。

分科会

オンライン配信
8月25日(水)　14:00～

模擬授業

講　師

授業デザイン研究所　代表
前岡山県立林野高等学校　校長

三浦　隆志 様

司　会

フリーアナウンサー

野室　美佳

(模擬授業要旨)

「主体的で対話的で深い学びの体験」

学習テーマは、教科歴史総合の「第１次世界大戦後の日本社会」であったが、この時代について教科書をもとに６～７時間の学習した後という授業設定であった。学習活動 Part. １は、テキストの明治８年から13年の年表を見て、生徒の知っている項目をチェックさせ、それを他の生徒とシェアをする活動であった。シェアをすることは、相手から教えてもらったことで自分の持っている知識がバージョンアップすることになると三浦先生は話す。また、本日は出来ないがＩＣＴを使って全体の意見集約も可能であると話した。次は、この年表と別のテキストの1879年(明治12年)の府県別コレラ患者発生数の表から、自分で分かることをいくつもあげて、それを他の生徒とシェアをしていく活動であった。生徒の話し合いの中で東京の街中よりも、全国の港町に多いという気づきがあった。その後、三浦先生は「証拠はないがこれは西南戦争が関わっている。当時の兵隊は船で運んだので、戦場への行き来の多い港町に蔓延した。」とまとめられ、生徒は納得していた。

学習活動 Part. ２は、本日の授業の本題「第１次世界大戦後の日本社会」であった。〈活動１〉は、あらかじめ配付されているテキスト「第１次世界大戦の時代様相と世界状況を理解する」を読んで、その内容から1918年（大正７年)から1923年の国内と海外の年表を作成して、シェアをすることであった。三浦先生は、「出来ていても出来ていなくても関係ないよ。」と生徒に声をかけていた。〈活動２〉は、新たに年表と同じ時代の７枚の資料(当時流行したスペイン風邪の新聞記事､永井荷風の労働ストライキを書いた随筆､大戦景気に湧く新聞記事､大正期の賃金・物価などのグラフ）を配付して、「今から100年前の1921年はどのような時代であったのか。先ほど作成した年表や７つの資料から考えられることをいくつもあげてみる。」というものであった。生徒は、当時のスペイン風邪流行、労働問題、賃金格差などを話しあっていた。三浦先生は、これらの意見の集約を行わなくてはならないが、その散らかった知識をまとめるために次の問いを用意していた。「あなたは、1921年に生きているとします。そのあなたが100年後の世界を覗いたとします。そのとき、あなたは現代の私たちにどのようなメッセージを送りますか。」という問いであった。知識を自分のものにするには､それがあまりにも膨大なので､子どもたちは覚えるのに精一杯で活用することなく忘れてしまう。その知識を自分のことに置き換える活動を入れると散らかった知識がまとまっていくと三浦先生は話した。

さらに､三浦先生は活動した後に大切なことは振り返りをすることだと話す｡振り返りシートには､「なるほどと思ったこと」や感想を生徒に書いてもらう。これは、教師自身の評価にもなる。例えば、学習活動 Part. ２のまとめとして「第１次世界大戦後の日本は、庶民の生活は苦しかったが、一方で国際連盟に加入するなど日本は世界に出て行った時代であった。」とすれば、「なるほどと思った」欄にこのまとめと生徒が記入する内容を比べることによってこの授業の評価が出来る。また、振り返りシートの感想欄は、生徒の学びに向かう力を知る手がかりとなると話した。

教師たちは、いかに生徒の頭を動かすようなテキストや映像を見つけてきて、生徒たちが主体的が考える授業をするか。これからの高校の授業は変わると三浦先生は語り、模擬授業は終わった。

第２分科会

企　画　グリー株式会社

録　画　７月27日　さんいん中央テレビ

「正しく怖がる」で創るネットとのご縁
～ＳＮＳ・スマホで絶対に失敗しない方法とは～

基調講演

講　師

グリー株式会社
社会貢献チーム
マネージャー
小木曽　健 様

司　会

フリーアナウンサー
森山 悟子

（講演要約）

この写真を見てください。東京、渋谷のスクランブル交差点、何もなければ１日数十万人が行き交うこの場所で、ボードに自身の大切な情報、好きな方のフルネーム、人には言えないような考え、そういったものを書いて、貴方は30分ぐらい立っていることが出来ますか。出来ないでしょう。ネットに何かを載せるっていうのは、この交差点そのままです。

2011年３月11日、ロンドンから発信された東日本大震災当日の助けを求める１つのツイートが拡散され、東京都が編成したヘリコプターの救助部隊が、446人の命を救った事例がある一方で、コンビニエンスストアの店員が不適切な動画を載せるなどのネットの炎上事件が絶えない事例もいっぱいあります。問題を起こした人の身元がわかるのは、大抵３～４時間です。何でそんなに時間がかからないのでしょうか。その理屈の１つに100万人以上というのがあります。あれこの人知っていると言える人間が必ずこの中に１人はいるような、そう言い切れる数字、これが100万人以上の意味です。個人情報ではない、ささいな情報、ただの風景写真などを100万人がつないで、分析して、一つの情報に変えてしまうことになります。この例として、実際ＳＮＳにあった女子大生の書込から、私はその学生の住むアパートの部屋を探すこともできます。個人情報を載せていなかったら大丈夫でなく、ネットに載せる

ときは、載せる前に載せた後のことを前もって想像する力が必要なのです。

こういった話をすると高校生ぐらいになると、やばい時は設定を変えて、友達限定、拡散しない制限入れているから、この投稿は拡散しないと言います。でも、誰かに見せたかった情報は、受け取ってしまったこの友達はやっぱり誰かに見せたくなるので、それはスクリーンショットにして広がっていきます。ネットに友達限定はありませんので、友達限定のいじめの動画を投稿しても投稿者はすぐに分かります。そして、知人、家族、所属する組織も含めて公開され、炎上が始まります。炎上は一度始まったら、相手を灰にするまで止まりません。それを止めるには、ネット上では、60回、70回、80回と引っ越しを繰り返したら解決できます。しかしながら､解決できない炎上の本当の恐ろしさがあります。それは、本人が進学、就職、結婚など人生の大切な場面でぶり返すことです。紹介したいじめの動画に出てくる加害者は、これを全部背負って生きていかなければなりません。助ける方法はないのです。

ネットいじめという言葉は嫌いです。ネットは、ただのいじめの道具であり、ネットがなくなっても、いじめとやらは形を変えて続くからです。しているのは人間だからです。ネットといじめはしっかりと切り離して欲しいと思います。ネットは道具だから、失敗しない方法はあります。日常とインターネットの境目はありませんので、日常でしていいことはネットで何をしてもいいのです。そして、日常でしてはいけないことはネットでもしてはいけません。みっともないですし、人生が終わってしまうことになるかもしれません。これがネットで失敗しない答えです。

皆さんの自宅の玄関ドアに貼れるものは、どんなものでもネットに書いても、何も起きない保証はできます。しかし､玄関に貼るにはみっともなさ過ぎるものをネットに書くと多分人生が大変になります。なぜかというと､ネットって全部が家の外だからです。インターネットにつながっているものは全部、家のドアの外側です。家の玄関に貼れないものはネットに書かないほうがいいのではなくて書いたらいけないのです。貼れないっていうのは、人生が望まない方向に大きく変わるものです。貼れる貼れないの基準を間違えないことが大事です。

では、玄関の外側で炎上させてしまったらどうしたらよいのでしょうか。会社が炎上の大騒ぎになると、上司が必ず言う言葉があります。「そんなもの、急いで削除させなさい。」これは、大抵駄目なパターンを招いてしまいます。何が起きるかといえば、これはやばい書込だと思った人が保存（コピー）したものが、オリジナルが消えた瞬間に価値が生まれて、拡散していきます。さらには、消すことによっておわびをする場所も失ってしまいます。交通事故を例に取れば、救護などしなければいけないことが山積みなのに、なかったことにするという選択肢はないはずです。それは、ひき逃げになりますから。事故現場から逃げ出すというのは、ネットでいえばアカウントを削除することに似ています。ネットの炎上に対して具体的にどうすればいいのでしょうか。まずは、関係する直接の当事者に速やかに謝ること、これが一番大事です。そして次に、炎上したブログの続き、震源地にその続きを書くことを勧めます。書く内容も決まっていて、まず謝罪です。言い訳は絶対に書いてはいけません。その上で､「ありがとう。」を添えます。謝って、その理由を説明して、最後にありがとうと言うことで、大抵の炎上は少しだけ主導権を取り戻すことができます。ここから先はもう努力しかありません。企業として謝罪をするのであれば、絶対にその本人の謝罪よりも後にしたほうがいいです。そして、何かしら自分たちのマイナス点を挽回しようとすれば、もう一回炎上する可能性が高くなりますのでしないことです。

このように話してきたことを踏まえていれば、大人も会社も官公庁、もちろん子どもたちも、ネットで失敗する可能性はほぼゼロになると思います。この基準は全てのインターネットに適用できるものです。この講演をお聴きになった方は、別の方にこのことを伝えていただければ嬉しいです。ご不明な点などありましたら、私個人でもツイッターもしていますので、検索していただければいつでもお問い合わせをいただけたらなと思います。本日は、ありがとうございました。

第３分科会

録　画　７月28日　さんいん中央テレビ

「地域で育む未来への学び」
～教育の魅力化でひろがる新たなご縁～

基調講演

講師＆パネリスト

一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム　代表理事
島根県教育庁 教育魅力化特命官

岩本　　悠様

（講演要約）

演　題　**「地域社会のご縁でつむぐ高校魅力化の過去・現在・未来」**

○今村久美コーディネーターからの話題提供

特に都市部で子育てをされているご家庭で育ってきたお子さんたちが、あえて地方の学校を選ぶ、そういった流れが今始まっております。この流れは、北海道から沖縄まで27都道府県に広がる78校の公立高校で、500名の中学生の方々の選択肢になっているということです。15年前にご本人も東京育ちのシティボーイだったにもかかわらず、島根県の海士町に移住されて、この大きな流れの火つけ役となった仕掛け人、岩本悠さんをここからお招きして、お話を聴くところから始めていきたいと思います。

○岩本悠講師の講演内容

私が関わり始めたのはちょうど14年前です。島根県の隠岐諸島にある隠岐島前高校はどういう状況だったかと言いますと、いわゆる人口減少、少子化の中で生徒数も減り、学級数が減るというタイミングでした。

最初は、県立高校の中だけでどうこうしようとしても、教員も多忙ですし、なかなか動ける時間だとか余力もないという中で、高校と地元の町村や教育委員会、そしてＰＴＡ、あと卒業生会とか地域の方々一緒になって、この学校をこれから本当にどうしていくのかということを話し合う、そういった場づくりから始めました。その中で、今でいうスクールポリシーというか、地域や学校の課題、そしてこの地域のこれからの姿を描きながら、この学校の目指すべき姿を対話の中でつくり上げていくということをやっていきました。それは、課題を発見、

解決していく力や、価値を多様な人たちと共につくっていく力を身につけ、そして、地域だけではなく、グローバルな視点とここで生まれ育ったことの誇りや感謝を持って羽ばたいていけるような、そういう若者たちを一緒に育てていこうというものでした。

地域には人口減少など、少子化の中で本当に様々な課題があります。ただ、この課題こそが最大の、もしかしたら教育資源になっていくかもしれないということで、この隠岐島前地区の課題を一つの教材として取り上げていくような課題発見解決型の学びから、まず始めていきました。２年生の段階では、海外研修なんかも取り入れて、今いるこの地域と真逆の都市型発展をしていったシンガポールなどの国に行って、改めて異質性や越境体験の中で、この地域の魅力や課題を、もしくは自分たちの価値観みたいなものを再発見していく、そんな機会もつくりました。また、海外研修地の国立大学とかで自分たちの行っているプロジェクトをプレゼンテーションしたりとか、フィールドワークをしたりもしました。このような機会は、地域の支援なしでは出来なかったと思います。

ただ、やっぱり学校の課題としてあったのは、生徒はずっと地元の少ない人数の中で育ってきて、クラス替えもないような中では、生徒同士の関係性が固定化していくとか、刺激や競争や新たな人との出会いが少なく、そのために何事にもチャレンジしていくような精神とがなかなか育まれにくいというようなことでありました。そこで、この地域でいろんな異質な出会いだとかが経験できる、そんな環境をつくっていけないかということで、全国から意志ある多彩な脱藩生を募集しようということになりました。これが、島留学の始まりです。

どうせこんなところに子どもたちが来るわけないじゃないかという声もありましたが、始めてみたら、都会とか全国、時には海外からも生徒が来る。そういった子たちを受け入れてくれる島親、ホストファミリーのような存在なんかも、地域で広がっていきました。こういう環境の中で、こんなこと学んでみたいという思いを持って進路実現をしていくような生徒なんかも増えてきて、結果的に、例えば国公立とか難関大学と言われるようなところにチャレンジをしていくような生徒なんかも増えていったというところです。そして、10年ぐらい経過すると、ここでこの地域から自分の人生やこれからの未来をつくっていくんだというような卒業生たちのＵターンという流れなんかにも、つながって来ています。

○今村久美コーディネーターとの会話から岩本悠講師の話

自分は今は海士町を離れていますが、当時を振りかえれば、自分がここにいることで、この地域の未来が変わっていくというところに関われるような感覚だとか、何かやったらすぐ反応も返ってくる面白さとか、やっぱり大きい都市でなかなか感じにくいものを体験出来たと思います。10年前は、学校も小さいところを潰して大きいところに集めていくっていう、効率化していくという流れが全国的にありました。ただ、最近これも変わりつつあって、自立分散型の国づくり、いわゆる地方創生の流れなどに見られるように、東京一極集中の流れから地方へというふうに国もかじを切りました。この高校の魅力化もどちらかというとそのはしりでした。小さいからこそできることがあり、だからといってじゃあ教育の質が下がるのかといったら、いやそうじゃないと。今はＩＣＴを利用すれば世界中の人々と繋がることも出来ます。島前もそうだし島根県の多くの学校がそういった挑戦をして、大きくなくても魅力的な教育ができるということに、今はトレンドが少し変わりつつあると思っています。

最後に、学校自体は多忙であり、教育そのものが本務であり、学校と地域、外国を含めた地域外、そして生徒をつなげる縁結びの仕組みが必要と考えます。それが、コーディネート機能です。島根県では、現在 51 名のコーディネーターが学校と地域を結んでいます。こういった資質能力は教員にも必要ですが、この配置・育成は自治体だけでなく、ＰＴＡが担ってもいいのではないでしょうか。必要であれば、プラットフォームに連絡ください。

パネルディスカッション

コーディネーター

認定ＮＰＯ法人
カタリバ
代表理事
今村　久美 様

司　会

フリーアナウンサー
野室　美佳

パネリスト

島根県立島根中央高等学校
校長 立石　祥美 様

島根県立津和野高等学校
魅力化コーディネーター
一般財団法人 つわの学びみらい
事務局次長
山本　竜也 様

地域みらい留学生保護者
池本　洋一 様

地域みらい留学生卒業生
大学生　鈴木　元太 様

島根県立隠岐島前高等学校
２年生　岩永　真詩 様

島根県立隠岐島前高等学校
２年生　青山　光輝 様

（協議要約）

○今村久美コーディネーターからの話題提供

地域の公立高校が全国から生徒に来てもらって、その学校のあり方をとらえ直そうという動きについて岩本様と話してきましたが、生徒が増えて本当に魅力的な学校になっているのか。実際、関係した人たちに聞いて話を深めて行きたいと思います。最初は、隠岐島前高校で学んでいる生徒の皆さんから話を聞きます。

○岩本講師、青山光輝さん、岩永真詩さんとの対談

今村コーディネーター　お二人が隠岐島前高校を選んだ理由を聞かせてください。

青山さん　札幌で生まれたのですが、小学校３年生のとき家族が島に移住してこちらで生活しているので、私は島内生です。自立したいということもあって、最初は神戸市にある高校を志望していましたが、姉２人は隠岐島前高校に進学して、地域の人たちと関わりながら活き活きと学校生活を送っていたので、12月になって急に隠岐島前高校に進学することを決めました。その選択を親が許してくれました。

岩永さん　中学は、東京の中高一貫校でしたが、部活などの人間関係で悩んでいるとき、母が隠岐島前高校のオープンスクールを見つけてきて、海士町を訪ねることになりました。民宿の人が優しく温かく、ここなら自分も成長できるかもしれないというこんな直感と出会いから隠岐島前高校に進学することを決めました。

今村コーディネーター　島での生活は、異質性の出会いであり、地元のグループと島外のグループとどう混じり合って行くものですか。

青山さん　始めはお互いを知らないから、いろんな情報を出し合えるので、１週間くらいで打ち解けます。授業中、小学校の時はみんな手をよく挙げていたが、中学校では挙げなくなりました。でも、高校になって島外生がみんな手を挙げるので自分も手を挙げたくなりました。

岩永さん　自分はそういう境目は持っていないので、どこにいても自分が変われば周りも変わると気づきました。寮生活は、お互い生まれも育ちも違うので互いを認め合わなくてはなりません。

今村コーディネーター　ご家族の方は、今のあなたたちを見て今どう思っていますか。

岩永さん　母は賛成でなかったが、島での活動や学校生活の充実を知ってくれて、今は見守ってくれています。親にしてもらったことを今は自分でしないといけないので親のありがたみがよく分かります。

岩本講師　あなた方の未来を聞いてみたいです。

岩永さん　今は具体的なことは考えていません。島留学で視野が広がってきたので、自分のできることはいっぱいありそうで、今は自分探しをしています。

青山さん　将来の夢は、観光業に興味を持っています。地域にたいへんお世話になっていますので、その恩返しというか、大人になってもそれをするために地域の人たちとイベントに関われたらいいなと思っています。

○今村久美コーディネーターからの話題提供

地域みらい留学や高校魅力化が県内の他の自治体では、どうなっていてどんな広がりを見せているのか、卒業生や子どもを送り出した保護者のかたに聞いて見ることにいたします。

○岩本講師、鈴木元太氏、池本洋一氏、山本竜也氏、立石祥美氏との対談

岩本講師　島根県は新たに策定した県立高校ビジョンのなかで、「地域社会を舞台にした探究的な学び、多様な人間との協同によるプロジェクト学習の展開」として、各学校が学校魅力化のネットワークをつくり、2021年度は県全体で230名の県外生が入学してきています。学校魅力化に取り組む高校の生徒のほうが、地域に関わることや社会に役に立ちたいという意欲が全国平均より高い傾向にあります。私が創設した（一財）地域・教育魅力化プラットフォームの事業として、全国で合同説明会を行っており、昨年は3,000名を超える参加者がありました。全国でも26道県70校の高校が地域みらい留学生を募るなど、隠岐島前高校で始めた地域みらい留学は大きな流れになっています。

今村コーディネーター　島だからできたのではなく、他の高校でも出来たのか。立石校長先生に聞いてみましょう。

立石氏　私の勤める島根中央高校は、島根県の中央部にある人口3,100人くらいの川本町にあります。平成19年度に県立高校再編計画で２校が統合して開校されました。地元町内の中学生は毎年20名くらいしかいませんが、本校の入学定員は105名です。平成24年から町と一緒に県外生の募集を始め、現在は毎年30名程度が入学してくれています。この３年間の入学理由を聞いてみたところ、部活動が46％、カリキュラムが32％で、地域と協同した学習活動が魅力になっているのだと思います。

今村コーディネーター　次に地域みらい留学の卒業生、鈴木さんにどういう高校生活を過ごしたのか聞いて見ましょう。

鈴木氏　高校より町で過ごした３年間だったと思います。私が通っていた高校は島根県西部中山間地にある人口7,000人の津和野町にある津和野高校でした。私は、横浜出身ですが生まれは北海道です。北海道では、竹をあまり見なかったので竹林に関心がありました。その竹林が管理されていなく、竹林整備をどうしたら良いのか町の人に竹林を借りて考えてみました。この活動を通して、町の人とのコミュニティーにも関心を持ちまし

た。このことをきっかけに、東京大学に進学して建築とか街づくりの研究をしています。昨年は、大学がコロナ禍でオンライン授業となったので、津和野町で過ごし高校生と課題に取り組んでいました。

立石氏　中山間地域では、日常で大学生との出会いがありません。自分の少し未来の人である大学生と触れ合う機会は、生徒にとってもとても良い学びになります。

今村コーディネーター　地域が外に開かれていて、外から来る者と共存しているところに高校があり、その高校が地域に開かれていることは大切なことです。次に、親としてそんな田舎に子どもを行かせていいのかと思うのですが、親の立場から池本さんにいろいろお話しを聞きましょう。

池本氏　埼玉県在住です。私の次男が津和野高校に入学しました。入学して何が良かったかといえば、一番はコーディネーターさんがいて、地域の人、学校、進路などと本人を繋いでくれていることです。埼玉にいれば同質性の中で狭く窮屈な環境の中で過ごしたかもしれません。津和野では多様なバックグランドの子どもや親と交流でき、異質性を知り、広がり、人生の糧となりました。東京の偏差値の高い高校にも合格していましたが、津和野高校に決めたのは本人でした。

今村コーディネーター　大学に入るまでは、一生懸命受験勉強して大学に入ったら何をするのか探す。これが私たち旧世代の勉強観ですね。今は、地域と学校教育が繋がって、高校での課題を大学で学び、研究のフィールドを広げていく学び観が大切ではないでしょうか。

池本氏　親として、なぜ津和野に行かせたのかとよく聞かれました。まず本人の意思を尊重したが答えですが、親としては、大学は専門を学ぶ場であり、どの専門に興味を持つかの幅を広げてくれる高校がいいなと思っていました。受験に向けた指導に手厚い高校で、偏差値の高い大学に入るほうが、将来の可能性を広がるという見方もありますが、言われたことを生産性高く取り組むことより、自分で課題を見つけていろいろ取り組む方が良いように思えます。親は、学校や塾に子どもの進路をお任せし過ぎです。地域みらい留学で、子どもの進路について子どもや親同士で話すようになりました。子どもの選択肢の幅を親が知らないとまずいのではないかと思います。

今村コーディネーター　スーパースクールで学ぶのも良いが、リアルの生活から学ぶのも良いのかもしれませんね。

岩本講師　３年間子どもさんの成長はどう見えましたか。

池本氏　プレゼンテーションがうまくなり、人前で話したり説明したりする力が高まりました。今でも津和野町の観光を変えたいと思っており、今、慶應大学で学んでいることを実践させてもらうかもしれません。

今村コーディネーター　先ほどの説明でコーディネーターがいたという話が出ましたが、コーディネーターとは何でしょうか。津和野高校でコーディネーターをされている山本さんに聞いて見ましょう。

山本氏　高校のある町が雇っています。津和野町では、４名が学校に常駐し、しない者を含めると５～６名が津和野高校に関わっています。

立石氏　島根中央高校は、町の負担で７名のコーディネーターに来ていただいています。高大連携や探究学習、生徒募集など役割も様々です。教員がなかなかできない、学校と地域をつなぐことをしっかりやっていただいています。

山本氏　高校生から、こういうことをやってみたいという繋がりから、高校生の変化をみて、そこから自分も変化を受けることは面白いです。

池本氏　コーディネーターは、せっかく地域みらい留学したのに、何をしていいのか分からない生徒を地域と繋いだり、この生徒の特性からこの大学の総合選抜入試がいいのではと提案したりしてくれています。

鈴木氏　生徒の生活環境が変わるので、学校の先生以外で話せる人がいることは大きいです。コーディネーターは、町に一緒に住む一員という感じです。

今村コーディネーター　山本さんは、とても活き活きとしていらっしゃる。生徒だけでなく、コーディネーターとして外から入った人も成長し続けられる地域の土壌観があるのでしょう。ところで、学校の先生からすれば見せ場をとられたということはないですか。

立石氏　それはないです。逆に憧れます。

岩本講師　コーディネーターは、島根県では当たり前になりつつあるが、全国ではまだ少ないです。異なるものの縁を結んでいく機能がコーディネーターだと思います。文部科学省の普通科改革に関する制度改正の概要には、学校のコンソーシアム構想にも関連する関係機関との連携、協同を調整するコーディネーターの配置が盛り込まれています。

今村コーディネーター　本日は、素敵なお話しどうもありがとうございました。それでは、これで第３分科会を終了とさせていただきます。

第４分科会

録　画　７月27日　さんいん中央テレビ

体験でつなぐ人々とのご縁
～「人生100年時代」「不確かな時代」を生きるためのキャリアデザイン～

基調講演

講師＆パネリスト

ノンフィクション作家
中村　安希 様

（講演要約）

演　題　「とにかくやってみる」

今日は、この非常に不確かな時代にどのようなキャリアデザインをしていけばいいかということで話してほしいと言われていますが、私なりに考えた１つのキーワードとして、「とにかくやってみる」と。それは何かがうまくいくとか約束されたことではないかもしれませんが、どういうふうに人生が転がっていくのか、やることによって何が変わっていくのか、その辺りのことを今日はお話しさせていただければと思っています。

高校生・大学生になって義務教育から離れて自分で生きられるようになっていくと、自分の手で物事を変えていくことができるようになります。それは自分で人生を変えていけるということです。私の場合、まず１つ目の転機が16歳のときの高校のマレーシア研修でした。動機は友達が行くからでしたが、それでも行動を起こすということで新たな発見があります。マレーシアの高校生は母語の他、英語などいろいろな言葉が話せて、スピーチもうまく、社交的でした。私は全然英語ができない。当時のマレーシアの首相が、日本に憧れて日本のようになりたいって思ってくれているのに、現地に行ったらマレーシアの高校生のほうがはるかに何だか将来が豊かに見えるという思いになりました。英語が出てこないとか、そういう部分を根本的に克服しなければ自分に未来はないなという思いになりました。

高校を卒業すると同時に、映画産業で特撮をやりたいという思いもあって、次の行動に出ることになります。アメリカの２年制大学、コミュニティーカレッジに留学します。アメリカに行って気づいたことは、映画はもう

特撮の時代ではなくてほとんどがコンピューター技術にフォーカスが置かれていました。自分が憧れていた映画づくりというのはもうアメリカにはなくて、むしろそれなら演劇のほうがいいということが分かりました。それで、演劇専攻に変更しますが、有色人種に与えられるような配役というのもほぼなく、そこで次の行動を取ります。４年制大学のカリフォルニア大学アーバイン校に編入学します。

大学では面白い出会いが待っていました。長崎の原爆を基にした演劇をする長崎レインプロジェクトというプロジェクトに参加する機会に出会いました。そこで、私の人生を変えたリオ先生に出会います。ある日、リオ先生とパートナーのタケル先生は私を家に招いてくださって、自分たちがこれまでに旅をしてきた世界旅行の記録だというアルバム見せていただきました。とにかく芸術家になりたかったら旅をせよというのが、このリオ先生、タケル先生の教えでした。

その言葉を真に受けて、東京で２年ぐらい働いてお金を貯めて、26歳の時、世界旅行に出発しました。ゴールはポルトガル、それ以外は何も決めずに、一番安いところでインドの宿が１泊50円とかいうのもあって、アフリカも中央アジアも通過しながら、結局２年間で47か国を旅行します。そして、その旅でブログを始めるのですけれども、これも「とにかくやってみた」ことの一つです。旅に出る前に東京で医療改革に関わるＮＰＯに参加していたのですが、その人たちに旅行中に訪ねた国の衛生状況などのメールマガジンをやれということで、レポートを書かされるようになります。それがきっかけで、英語版、日本語版の「安希のレポート」という旅ブログを始めることになります。２年間書き終えたときに、原稿用紙に4,000枚以上の書き物が残っていました。人に言われたことを一生懸命「とにかくやる」ということをやっていった結果です。

旅に出たせいで、私の貯金通帳の貯金残高が4,000円を切ってしまっていました。一旦、地元の信託銀行に就職するのですが、単調な仕事になじめず信託銀行を辞めまして、まず旅の世界にもう一度戻るという意味で、書きためてきた原稿用紙4,000枚以上のブログを１冊の本にまとめるという作業に取りかかります。その時点で何か「とにかくやってみた」ほうがいいということで、賞に応募したら受賞しました。受賞作は「インパラの朝」という旅の本ですが、このようになりますと、次の展開があります。受賞したことによって、私はある日からノンフィクション作家になりました。７年ぐらい全く慣れないノンフィクション作家という仕事をやってきて、2015年はミャンマーにいました。アウンサンスーチーが率いる国民民主連盟が選挙で歴史的な大勝を収めた年です。そのミャンマーで、昔からの友達である香港人にノンフィクション作家としてやっていくにはどういうことか、ジャーナリズムとは何か、そういうことについて打ち明け話をします。その友達の熱心な勧めで、香港大学大学院に進学します。ジャーナリズムを初めて勉強して分かったことがありました。それは、私はジャーナリズムに向いていないと。何かの行動によって自分に不向きなものを見つけて、それを選択肢から外していくというのも、一つ行動をするすごく重要な意味だと私は思います。

香港大学で大失敗した後遺症を引きずりながら、今いろいろやっているところです。この数年は、本も書きますけれども、京都の宇治茶を刈ったり、森林保護のために近所の森の伐採をやったり、それから、家の周りを鹿とかイノシシが畑を荒らしたりするので捕獲して肉に解体してその肉を配るということもしています。それが無駄だと分かっても、それは無駄ではないですし、もしかしたら何か面白いことに結びつくかもしれません。

高校生にこういう話をすると、「自分は失敗するのが怖くて何もできません。どうしたらいいですか。」というような質問をよく受けます。失敗するのが怖い、私もそうですけれども、何かを行動を起こしたときに、その結果へのこだわりというのがみんなの足をすくませるのかなと思います。それから、何も出来ないでいる理由に怠け癖があります。このことが理由で私はこれができないんだという、これはもう今自分自身にも本当に言い聞かせなければいけない言葉だと思っています。「とにかくやること」で得られるものというのは、成功ではありません。それは次の展開です。行動によっても必ずしもうまくいく保証というのはありません。ただ、失敗したとしてもその次の展開というのが必ずやってきますので、それを信じて一歩を踏み出してみてはいかがでしょうかということで、今日は「とにかくやってみる」という話をさせていただきました。ありがとうございました。

分科会

オンライン配信
8月25日(水)　14:00～

パネルディスカッション

コーディネーター

島根大学
地域未来協創本部
人材育成・キャリア
デザイン部門長
准教授
丸山　実子 様

司　会

フリーアナウンサー
森山　悟子

パネリスト

一般財団法人 全国高等学校
ＰＴＡ連合会
顧問　**牧田　和樹 様**

島根県立浜田高等学校
校長　**熊谷　修山 様**

松江市立皆美が丘女子高等学校
卒業生 **森脇 美麗空 様**

（協議要約）

丸山コーディネーター　第４分科会は、体験や人との出会いを自分のキャリア形成にどう結びつけていくかを中心に話しを進めていきたいと思います。それぞれの立場でキャリアデザインについて感じていることはありますか。

牧田氏　キャリアデザインせずに生きている人がほとんどいないのではないでしょうか。人生は描いた通りにならないことが多い。「不確かな時代を生きる」には「不確かな人生を生きる」という視点も含まれるのではないでしょうか。

熊谷氏　進路指導が「出口指導」から「キャリア教育」になった頃から「人生の全体像」を考えるようになりました。到達点を見据えて逆算する、つまりキャリアデザインをするという考え方です。ただ、一直線に目標に向かう人はそんなにはいません。中村先生のおっしゃった「やってみる」の積み重ねの中で、「向いてない」と感じる「うろうろ」感を重ねていきながら、だんだん輪郭を持ってデザインされていくのではないかと思います。高校時代に自分が何に向いているか、向いていないか「うろうろする時間」を設け、そして少しでも見通しを持てるようなプログラムを子どもたちに持たせることが大切であると思います。

森脇氏　高校生のときにシンガポールとマレーシアへ行きました。初めて海外に行って視野が広がる経験をしました。それがきっかけで、大学生のときにラオスの子どもたちを支援する活動に関わりました。高校時代の

「うろうろ」は将来につながると思います。「うろうろ」を体験するためには、子どもたちの「やってみよう」という意欲を家族や学校の先生など周りの人たちがサポートすることも大切です。私が経験したことから言えることは、子どもたちがもっと海外交流ができる機会などいろいろな体験できるきっかけを大人たちは増やしてほしいと思います。

中村講師　何かをやろうとする、経験しようとするときに、「これをやったら何が得られますか、どんなメリットがありますか」と考える子どもが多いように感じます。それは今かもしれないし、10年後かもしれないし、20年後に何か他のものと結びつくかもしれません。今の子どもたちは、直接的なメリットや答えを求めすぎる傾向が強いように感じます。スティーブ・ジョブズは、スタンフォード大学の卒業式のスピーチ「コネクティングザ　ドッツ」では、いろんなドット、つまり経験が結びついて線になったときに何かが起きると語っています。人生の経験はそういうものではないでしょうか。「このドットを攻めたら次はこれがもらえる」というような考えをしないというアドバイスを子どもたちにした方がいいと思います。

牧田氏　何かをやろうとしたとき、必ず目的があり、行動に至る動機が大切です。直接的な成果を求める人は意外に「動機」がないと思います。ジョブズは一つ一つのドットに目的を持ち、手の平にコンピューターを収めたいという目的に向かって、ドットを線にしました。この目的がなければデザインできていないと思います。

熊谷氏　理想的には、子どもたちには目的を持って行動を起こさせたいですね。ただ、高校の現場では、目的意識や明確な動機を持たせることはたいへんです。キャリア教育の授業で子どもたちに学校が招聘した幾人かの社会人の方の中から、話を聞きたい人を選ばせます。そのときに「何となく」を大切にしたいと思っています。何となくＡさん、Ｂさん、Ｃさんを選んだ後で、３人の話の共通点を見いだしたときに、意外に自分はこんなものが好きだったのだという気づきが出てきます。ぼやっとした状態から少しずつ、輪郭を定めていく、そんなアプローチも高校の段階では必要だと思います。

丸山コーディネーター　中村さんは海外の大学へ行かれたわけですが、教育制度についてどう思いますか。

中村講師　アメリカの大学では、入学してからしばらく「うろうろ」して、一般教養をやり終えてから、自分の専攻を決めるところが非常によかったと思います。二つ専攻することもできて、コンピューターサイエンスと演劇の両方を専攻できます。その２つを組み合わせて新しいことを始める未来があると思います。現在、いろいろな職業がありますが、一生その肩書きで行く人はどれだけいるのでしょうか。高校生に職業のリストを見せて「さぁ、ここから１つ選びなさい」、枠を用意して「あなたはどの枠にはまるのかを考えなさい」ではなくて、その２・３の職業を組み合わせて新しいことを始めてもいいわけだし、そのほうが不確かな時代に順応できる可能性があります。高校卒業時に学部を決めなければいけない、この職業に就きますと決めなければならない、そういう教育をいい加減にやめたらどうかなと思っています。

牧田氏　戦後、高校はアメリカの単線型の教育制度になったので、高校時代は「とにかくやってみる」で将来何をするのか決める必要は無くなっている。ところが、大学は複線型のままなので、高校時代の学部選択が高校生はたいへんになっている。丸山さんの前ではあるのですが、大学改革も必要ではと思っています。

熊谷氏　高校で「うろうろする」には時間が必要ですが、進学校ではなかなか「うろうろする」時間がありません。結局は、学部を選んで、その学部に入学するにはどうしたらよいかにかなりの時間を割かなくてはなりません。現実は大学入試に備えて準備をしている状況です。

丸山コーディネーター　すべては、大学入試や大学教育につながっていますね。

牧田氏　「うろうろする」時間を大学がつくる必要があると思います。大学全入時代に入り、高校までの履修がしっかりしていれば、後は好きな大学に行っても良いよとなれば、高校生に選択肢は広がると思います。

丸山コーディネーター　大学も忙しく「うろうろする」時間をつくるのは難しく、学生たちはキャリアをデザインする時間があまり与えられていません。就職活動の時間にも問題があります。

牧田氏　就職問題は企業にも問題があります。大学で何を学んで、どんな力を身につけたのかをほとんど評価されず、大学入試の難しい大学から企業が人材を採っているのが現実かもしれません。

丸山コーディネーター　大学も高校も時間がないとなれば、自分の生活の中でキャリアを考える時間をいかにつくれるかですが、森脇さんはどうですか。

森脇氏　学校のどこかの時間を利用して、キャリア形成の時間を確保する必要があると思います。高校時代、2ヶ月に1回ほど講演を聞きました。学期に1回、そういう機会を設けてキャリアデザインする機会を作り、自分のキャリアについて考える時間を設けることは大事だと思います。

熊谷氏　各学校のキャリア担当が外部講師を招聘しています。魅力化コーディネーターがいる学校は、地域をうろうろしており、「こういう人がいる」と紹介してくれます。

牧田氏　学校で学んでいる期間は社会人ではないので、その期間を社会とつなぐのは大人の役目であり、社会とつながっていないと意味がないと思います。

森脇氏　授業で海外をあちこち回っている方の話を聞いたりして、自分の就職先を考えたとき、海外支援も視野に入れました。今は、先にも話しましたが、働きながら海外の支援活動を行いたいと思っています。高校のキャリア教育の時間で、その人と出会って現在の自分があるので、きっかけは大事だと思います。中村さんのような人と出会ったことがよかったと思っています。

中村講師　時々講演をする機会がありますが、高校生には話し甲斐があります。講演の最初に「今日の話は直接的には何の役にも立たない。あなたのキャリアには役に立たないから安心して聞いてください。何か面白いと思ったことを覚えて帰ってください」と言います。講演の後、ＳＮＳで相談してくる高校生もいます。そういう交流が大切です。そこで引く人は終わりと思います。そういう練習も含めて、高校生が講演に来た人とつながっていくというのもいいと思います。

熊谷氏　まさに大切なのは行動だと思います。「とにかくやってみる」。それが重要です。高校生はおとなしく、なかなか行動に移せない子どももいます。中山間地の学校では魅力化コーディネーターが、外とつないでくれます。動き始めるとどんどん動く、そんなエネルギーを高校生は持っています。誰が彼らの背中を押すか、背中を押す人材がいるかどうかが大事なポイントだと思います。

牧田氏　学校外のつなげ役、接着剤のような役割がＰＴＡです。そこにＰＴＡの意義があると思います。子どもたちにとって最も身近な社会人は保護者です。保護者としての役割だけでなく、社会人としての役割も持っています。そういう意味で、ＰＴＡの活動はもう少しブラッシュアップする必要があります。身近な社会人は、保護者であるということを保護者は忘れがちだと思います。

熊谷氏　キャリア教育というと先を考えることになりますが、将来は過去の積み重ねの先にあるものともいえます。高校生が、中学校の時どうであったか、小学生の時どうであったか、そこにキャリアデザインの種みたいのが有るかもしれません。それを一番間近で見ているのが保護者です。保護者と子どもの会話の中にもそういう種はあると思いますので、保護者の役割は十分にあります。押しつけたくないと考える保護者が多いですが、押しつけでなく、「こっちはどう」と水を向けるのはいいと思います。

丸山コーディネーター

本日のディスカッションの内容が子どもたちのキャリアデザインを巡る環境を整えていくことにつながればと思います。本日は、時間いっぱいありがとうございました。それでは、これで第4分科会を終了とさせていただきます。

第５分科会

録　画　７月26日　さんいん中央テレビ

グローバルにつなぐ教育とのご縁
～ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）と新たな明日への礎のために～

基調講演

講師＆パネリスト

関西学院大学　SGU 招聘客員教授
久木田　純 様

（講演要約）

演　題　「地球と私たちの未来：21世紀の生き方とＳＤＧｓ教育」

今日は、今の高校生がこれからどのような社会で生きていくことになるのか、彼らが生きていく上で解決しなければならない問題は何なのか、そのためにどのような力が必要とされているのかについて、2030年までの世界目標でありますけれども、国連の「持続可能な開発目標」ＳＤＧｓを手がかりに議論をしてみたいと思います。今の高校生は、2005年以降に生まれ、世界的にはＺ世代と呼ばれております。彼らの平均寿命は百歳を超えると予測されますから、21世紀の最後までそして多くが22世紀初頭まで生きることになります。気候変動や貧富の格差、爆発的な技術革新、そういったものが同時に進んでいく人類の歴史の大きな転換期に生まれ、我々からすると先が見えない21世紀を生きていくことになります。

今の世界は、地球温暖化による異常気象、海水面の上昇、生態系の破壊、パンデミック、それに伴うメンタルヘルスの悪化、サイバー攻撃などがすでに大きなインパクトを与えています。この前の世紀、20世紀の最大の特徴は、マネー中心の資本主義・産業社会だったと言われています。それによって、日本も豊かな国になりました。しかし、資本主義とグローバルな市場経済化は、先進国と富裕層が富を吸い上げ、経済格差がどんどん拡大するという世界的な構造を作ってしまいました。格差の構造の下半分では、豊かな自然と居住環境が奪われ、低賃金の搾取が行われ、それらが原因となって紛争や差別が起きています。

最大の問題はそこに暮らす子どもたちが十分な栄養を取ったり、教育を受けたりできず能力を高められないことです。世界の問題を解決するための力が育たず、格差の構造はさらに広がっていきます。この困難な状況にあ

る人々が今、移民や難民として豊かで安定した場を求めて大規模な移動を起こしています。また、そのような構造を暴力で破壊しようとテロや原理主義が広がっています。

これらの問題をどうやって解決したらいいでしょうかと高校生に質問すると、ＡＩやＩＴ、ロボットもあるのでそれを使えば、という答えが返ってきます。また、必要なテクノロジーの実用化は富裕層だけのものになり、人工知能やロボットを人間がコントロールできなくなるというリスクもあるので、テクノロジーのみでは問題解決しないという答えも返ってきます。議論を進めると、世界の格差の構造を変え環境対策のために人類が新たな生き方に移行しないと問題解決はできないことが分かってきます。

20世紀の典型的な人生は、教育を受けて就職し、最後まで勤め上げて退職、老後を過ごすというパターンが大半でした。しかし 21 世紀は、多様な生き方をする時代になってきています。また、20世紀には核戦争以外には地球全体が崩壊することはなく、自分の運命が終わるまでの人生を考えればよかったのですけれども、21世紀に生きる若者は、地球の運命が終わるときは自分の運命も終わることを考えないと生きていけないという時代になっています。したがって、こういう時代のグローバル化というのは、気候変動や格差などグローバルな問題を自分たちのものとして解決しなければ生きていけないということになります。

では、その問題解決はどうやっていけばということですが、まずは世界の貧困層への支援を行い、そこの子どもたちが心身ともにすくすくと育っていけるような状況をつくらない限りは、格差の構造は変わりません。もう一つは、豊かな者が必要以上のものを持たない、公平な分配を真剣に考え行動するということです。また、戦争や紛争をなくし差別をしないなど、社会の価値観そのものを平和でインクルーシブなものに変えていかないといけません。そして、気候変動対策を待ったなしで進めていく必要があります。

これらを包括的に検討し問題解決のための道筋と目標を議論したのが2015年の持続可能な開発サミットでした。そして、そこで合意されたのが国連の「持続可能な開発目標」ＳＤＧｓです。ＳＤＧｓの基本概念は、先進国も途上国もすべての人が一緒にやっていかないと地球の危機にもう対処できない時期に来ているという認識のもとに、「誰一人取り残さない」ということです。そして、持続可能な世界にするためには、私たちのライフスタイルや働き方、価値観、社会構造など、世界全体が有機的に変わっていく、つまりトランスフォーメーションが必要だということです。そういったものを全て考慮した上で、17の目標に分けて具体的に考え合意されたのがＳＤＧｓです。

今の時代とそして未来に向けて、高校生たちはどんな力をつければいいのかということなのですが、１つ目は、自分と地球との関係、その間にあるコミュニティーとか地方とか国とか、そういったものも含めて全てがつながるグローバルな視点を身につけ行動する力です。２つ目は、使命感を持って、諦めることなく地球規模の問題を解決していける力です。３つ目は、世界の多様性を豊かさとしてその相乗効果を出していける力です。世界は非常に多様ですが、日本の高校生は特にこの多様性のことを社会の中でなかなか実感ができていません。最近やっと様々な多様性について議論がされるようになってきました。これを豊かさとしてそのいろいろな多様性の中から、一番いい組合せを考えてもっと持続可能な世界をつくり出していこうとする力をつけて欲しいと思います。

私はユニセフの国連職員として30年間世界中で働いたのですが、実は、国連職員にもこの三つの力が常に要求されてきました。また、国連職員に求められる資質のトップ３は、一貫して公正や人権、平和を守り抜くというインテグリティ、高い能力と最後までやり遂げる力や忍耐力を持つプロフェッショナリズム、そして多様性ダイバーシティの尊重だと言われています。これからのグローバルな社会に生きる高校生にもこれが必要だと思います。

では、高校生はこれからどういうふうに自分の人生をデザインすればその力をつけていくことができるのでしょうか。まず、自分の地域と世界の関係性を構造的に理解していって欲しい。もう１つは「儲かるかお得か」ではなくそれが自分と世界の未来を確保できる「持続可能な世界を作るか」どうかという価値観ですべての物事を判断し行動する能力です。それから、人生を後悔しないためにも、生きがいと満足感を得られるキャリアや生き方を選んで欲しいということです。そのためにもまず自らのライフスタイルをサステイナブルなものに変えて欲しいと思います。教育はそれを後押しし、そして、その選択を若者ができるよう社会環境を整備していくべきだと思います。

最後になりましたが、Ｚ世代の高校生が、そして私たちが22世紀を迎えることができるかどうかは、私たち自身の生き方にかかっていると思います。それが、今の子どもを持つ親の世代の認識であって欲しいと私は考えております。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

コーディネーター

島根大学教育学部
准教授
香川 奈緒美 様

司　会

フリーアナウンサー
枡田 ひとこ

パネリスト

公益財団法人 日本ユニセフ協会
学校事業部　副部長
鈴木 有紀子 様

株式会社 タビカラ
代表取締役
サミーラ グナワラデナ 様

島根県立飯南高等学校
ＰＴＡ
本間　康浩 様

（協議要約）

香川コーディネーター　久木田先生のお話で、地球がどのくらい危機にさらされているのか、また、貧困、環境破壊等によって人々が分断され、その分断からテロや人権侵害が発生することがわかりました。こういう状況を踏まえて高校生、教育関係者、保護者、地域の人々がそれぞれの立場からこの地球の問題の解決をめざして具体的にどう行動したらよいか考えてみたいと思います。まず、今の高校生や高校生に係わる人はどのような未来像を描いて生活をしていると考えていますか。

本間氏　未来について高校生の息子に聞いたら最初に言ったことは地球温暖化でした。次にＡＩの進歩によって今まで人間がしている仕事がなくなるのではないかということや今までは田舎から仕事を求めて都市に出て行くという流れがあったが､都会でしかできなかった仕事が地方でもできるようになるのではと言っていました。

サミーラ氏　日本の高校生は何でも与えられ、田舎でも不自由のない生活をして、大事に育てられていると感じています。ある高校のグループプロジェクトで地域学があり、地域の人の話を聞く機会があります。先生や大人に言われて地域に入っており、やらされ感を感じていると思います。どうしたら自分たちから楽しめるようになれるかが課題です。そのために大人は何ができるのか、考えなければいけないと思います。

鈴木氏　ＳＤＧｓについてワークショップを行っています。あるワークショップで「これからあなたに一番影響を与えそうな問題は何か」について話し合いました。「地震・南海トラフ」「気候変動」「ＡＩの普及による雇用環境の変化」「年金」「将来に対しての不安」などがありました。子どもたちは、その課題に対して自分はどうするかと考えるようになります。子どもたちには、どういう未来にしたいかを問い、考える機会を作るとよいと思います。

久木田講師　問題を認識できればどうするかが出てきます。大事なことは自分が何をしたいかです。「内発的動機付け」が大事になってきます。「外発的動機付け」で外側からやり過ぎるとよくありません。おすすめの１つは、自分の人生をデザインし世界に出てみることです。「こんな世界になってほしいと思うから、こんな仕事に就きたい」と逆算で考え、進み始めると様々な困難に耐える力が備わってきます。そういう子どもたちが増えてくるように大人はサポートすることが大切だと思います。

鈴木氏　子どもたちが自分たちの力で何かを変えられたという成功体験を、なかなか学校生活の中では得られていないのではと思っています。なので、子どもたちの声を聞く場や、おかしいと感じていることがあるのならその声を聞く体制が学校にあればと思います。ＳＤＧｓは環境面が注目されがちですが、経済や社会の問題も含めて全ての問題が「人が生きること」に係わっています。ＳＤＧｓの基礎にある人権や共生も考えながら、社会をどうしたらよいか、どう変えたらみんながより良く生きられるのか、学校生活を通じてそういったことを考える練習をする機会が提供されるとよいと思います。

香川コーディネーター　高校生が自分の人生を考えていく上で、今ある仕事は大人になったときにはないかもしれません。2013年、オックスフォード大学のある研究室から、10年後にはどういう仕事がＡＩに取って代わられるかという研究が発表されました。それによれば、劇的に仕事のあり方が変わります。今あるものがなくなっても、今まで存在しなかったものを創造する力を子どもたちが身に付ける上で、何か助言はありませんか。

久木田講師　子どもたちは自分なりの関心を持ち、自分なりの考えで探究したいと思っているという前提で接することがまずは大事です。探究は、高校生の頃に海外でのボランティアとか日本でも貧困の現場に行くというような、自分の恵まれた日常とは異なった体験活動をしたり、本で関心を持つ子もいれば、人の話に感銘を受ける子、旅に出て見つける子もいます。ある子どもに「どうして国連職員になりたいの」と聞いたら「緒方貞子さんが難民の子どもたちを世話しているのを見て、こんな仕事あるのか」と言いました。このような機会を増やすといいと思います。それは親が考えている道と違ったり、遠回りをする道になるかもしれませんが、大人がそこを大切にすることで子どもたちが自分で考えていくことにつながると思います。

　セレンディピティという言葉があります。何かを探しているときに、探しているものとは別の価値があるものを偶然見つけることです。セレンディピティは人に会ったり、旅をしたり、本を読んだり、そういうことから始まります。子どもが前に進み始めたときにそれを打ち砕かないということが大切です。現代社会はそれを打ち砕いているように感じます。せめて親や教師はそれをしないでほしいと願っています。

香川コーディネーター　子どもたちは地球温暖化や核のリスク、貧困や人権の問題も遠いどこかの話で、自分とは直接は関係ないと思っているのではないでしょうか。子どもたちが地球上の様々な課題を身近に感じるための工夫、きっかけやプロジェクトを紹介いただければと思います。また、人権の問題をどのように教育の中に入れたらよいとお考えですか。

本間氏　バスケットボールの八村塁選手がいじめに遭った報道がなされていましたが、彼ほどの実力がある人がいじめられたということに子どもが驚いていました。子どもがそういう風に感じたことは、我々の高校生の時代よりも、今の子どもたちの人権意識は進んでいるのはないかと感じました。

鈴木氏　ユニセフも「子どもの権利教育」を進めています。日本も1994年に子どもの権利条約を批准していますが、条約や自分の持つ権利について知っている子どもたちは少なく、学校の先生も条約を読んだことのある

人は少ないのではないでしょうか。「子どもの権利教育」を進めるなかで、子どもたちは「自分は権利を持った主体である」と認識し、自分の価値にも気付くことができます。それは自己肯定感を高めたり、同じ権利を持つ他者を尊重したりすることにつながります。お互いの権利や尊厳を守ることのできる環境をつくり、学校で起こる課題も「人権」という視点から解決できるようになると良いと思います。また、地球温暖化などの課題を身近に感じるためには、まずその問題の構造を知ることが大切だと思います。地球温暖化による気候変動でもっとも影響を受けているのは、日本を含め温暖化を引き起こすCO_2などを多く排出してきた地域の人びとではなく、ほとんど排出してこなかったような地域の人びとです。CO_2を多く出すわたしたちの暮らしと、気候変動によって厳しい暮らしを強いられる人びとや子どもたちとは無関係ではありません。そして、「もし私がその子だったら」と想像し、権利を奪われた人の気持ちになって考える「共感」（エンパシー）を持つことも、課題を自分ごとにすることにつながると思います。

香川コーディネーター　ＳＤＧｓという言葉は、日本でも認知度も高まったと思いますが、「この活動は、ＳＤＧｓのどれに当たるのか」などとＳＤＧｓを切り貼りするような動きが見えます。人権という視点から教育で扱うべき大きな概念として「公正、公平」という言葉がＳＤＧｓのキーワードになると思いますが、その当たりどう考えますか。

久木田講師　基準の一つは人権です。憲法や世界人権宣言、国連憲章もそうですが、人類の叡智の塊です。もう一つは、問題を自分事として考え、たとえば、世界の貧困は自分が食べているものや自分の生活が関係していて、さらに世界の貧困が進むということの構造的な理解、さらには共感を持ってその構造を理解することが大切です。

香川コーディネーター　世の中を変えて行くには「価値」を変えていかなくてはいけません。今までの「お金を稼ぐことに価値がある」というところから「地球を守る、地球と一緒に生きていく」という価値観に変えていく必要があります。具体的に今の教育をこういう風に変えていくとか、有効な活動があればご提案いただければと思います。

サミーラ氏　まずは、課題を明確にするという作業が必要です。海士町に住んでいるときに思ったことは、海士町は人口減少から、何年後かに高校がなくなる可能性があるという問題が明確でした。高校がなくなると町の経済がどうなるのかなど、大人も子どもも何をすべきか見えてきたから、いろんな活動が活発になってきました。子どもたちに「課題を一緒に考えましょう」と言っても興味を持ちません。まず彼らがどこに興味を持っているのかを知り、そこから課題にアプローチすることを大人はサポートするべきではないでしょうか。

香川コーディネーター　最後に高校生や高校生の教育に係わる方々に向けて、どういう持続可能な社会をつくる方法があるかについて、話していただきたいと思います。

本間氏　私の住む飯南町は、保育所、小中高という一貫教育に力を入れてやっていて、飯南町のいいところを幼いときから学んでいます。地域の文化も実際に体験して、飯南町をどうしていくかという課題を皆で考えています。このような地域の教育活動が、今住んでいる地球をどうするかに転換ができればいいと思います。世界では文化、経済、宗教、生活様式など異なりますが、そもそも、住んでいる地球に住めなくなる時代がそこまできているということをみんなが共有できればいいと思います。我々は22世紀を生きないが、子どもに頑張れというのでは無責任です。我々大人も一生懸命考えながら、この環境を守っていくことが必要と思います。

鈴木氏　未来は100％今の子どもたちのものです。ＳＤＧｓは今の課題を分類して示したもので、将来のニーズが詰まっています。「ＳＤＧｓのどの課題に取り組んでみる？」と問えばいいと思います。課題には解決するわくわく感があります。「地球はだめになってしまう」という悲壮感ではなく、「この課題を解決できたら、素敵な未来が来る」と希望を持って、わくわくしながら課題解決に取り組んでいけるように、子どもたちを応援したいと思います。

久木田講師　今の高校教育の中で価値観を明確にすることはあまり進められていません。子どもたち自身が価値観を明確にすることを自分で考え、いろいろなことを経験しながら磨いて、いいものにしていく、それが子どもの生き方の核となります。そのためには「探究すること」です。探究することによって、この問題とこの問題がつながっていることがわかります。ＳＤＧｓは総合的に考えるそのきっかけになります。目標を見るだけでなく、実際の現実に触れることが必要だと思います。

サミーラ氏　「未知の世界を生きていく」ということは、「自分たちで好きな世界を作っていける」ことにもなります。どこに喜びを感じるか、たぶんセレンディピティだと思います。思ってもいないことに幸せを感じたり、そこに価値を感じたりする、自分が行きたいところ、作りたい未来を同じ価値観を持つ人、共感する人と共に作っていくことができる機会にもなります。

香川コーディネーター　今日のパネルディスカッションの中でセレンディピティ、人権、共感などいろいろなキーワードが出てきました。これは多様な人々がみんなで協力し、多様性をいい方向に向かわせることでもあったと思います。今日は貴重なお話をありがとうございました。

第６分科会

録　画　７月29日　さんいん中央テレビ

未来社会に対応するための教育とのご縁
～「主体的・対話的で深い学び」や「学校と社会の連携・協働」のあり方～

基調講演

講師＆パネリスト

独立行政法人 教職員支援機構
理事長　荒瀬　克己 様

（講演要約）

演　題　「生徒を主語にした学校づくりに向けて」

私が最初に勤めたのは、京都市立伏見工業高等学校でした。国語の教員をしていました。古文の授業で文語文法をやっていたのですが、うまくいきません。こちらが未熟で生徒にどう教えるかが分かっていませんでした。あれこれ自分なりに工夫していくうちに、一人の生徒が「分かった」と声に出してくれました。とてもうれしく思いました。驚いたことに、その生徒は満面の笑顔になっていました。分かると笑顔になるのだということに感動しました。生徒は分かってうれしい、教師は伝わってうれしい。学校というところはそういう、うれしいことのいっぱいある場所なのだということに気づかされました。

そうこうしていたとき、一人の生徒が「これなんぼになるん？」と尋ねてきました。私は最初その意味が分かりませんでした。土木科の生徒で、かれらが習っている専門の科目はどれもが資格を取ったり、就職したりするとき実際に役に立ちます。つまり、給料に結びついているわけです。それで、文語文法を身につけたら、いくらになるのか、どんないいことがあるのか、そう聞いていたのです。

しかしそのとき、私にはどう答えればよいか分かりませんでした。教科書に書いてあることを知る、身につける、といったことに疑いを持っていませんでした。その場は適当なことを言って逃れたのですが、このことが私の、教師としての重い本質的な問いになりました。学ぶことによって何を身につけるか。それをご一緒に考えたいと思います。

小中高校、特別支援学校には学習指導要領というものがあって、これに基づいて授業をはじめとする教育活動

が行われています。幼稚園の場合は学習指導要領と呼ばないで、教育要領といいますが、ここには私たちが人生において、こうなりたいと思えるようなことが書かれているように思います。

この幼稚園教育要領を含めて、学習指導要領には、各学校において編成する教育課程全体を通してめざす資質･能力を、「何を理解しているか､何ができるか(生きて働く『知識･技能』の習得)」､「理解していること･できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」、そして「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力･人間性等』の涵養)」という三つの柱で示しています。

それらを育成するために主体的・対話的で深い学びの実現を図ることが重要だとされています。かいつまんで言うと、主体的な学びとは、見通しを持って、粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることであり、対話的な学びとは、自己の考えを広げ深めることができることであり、さらに、深い学びは、知識を相互に関連づけてより深く理解したりして、問題に気づき見通しを持って粘り強く取り組むことであるということです。学習指導要領には、子どもたちが成長していく中で、よりよい社会をつくるという目標を学校と社会が共有しながら連携・協働していくため、社会に開かれた教育課程を実現するということも書かれています。

高校の新しい学習指導要領も同じです。学校教育法第30条第２項には学力の三要素が示されています、これが先ほどの三つの柱に整理されているのですが、「基礎的な知識及び技能」、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」、「主体的に学習に取り組む態度」の三つです。

知識や技能は大事です。これは学んで得た力です。ただ、それをどう使うのかもとても大事です。思考、判断、表現といった､結びつけたり切り離したり編集したりして､どう使っていくのか、そういう学ぶための力が必要ということです。それは、主体的に学習に取り組む態度によって可能になります。学習意欲、学ぼうとする力です。これらを総合して学力と呼ぶわけですが、この学力を育てることが重要です。

去年の５月、コロナ禍で学校が休みのときに、ある高校のオンライン授業に参加しました。その中で生徒が、学校に集まって授業を受けたり、友達と会ったりするのは、そこに新しい発見があるとか、違った考え方に出会えるとか、行かなければできないような実験ができるとか、そのようなことができるからで、それが学校の価値だと話していました。とても印象的でした。

幼稚園教育要領　第1章総則
第2幼稚園教育において育みたい資質･能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(H29改訂)

(2) 自立心
身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で，しなければならないことを自覚し，自分の力で行うために考えたり，工夫したりしながら，諦めずにやり遂げることで達成感を味わい，自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性
友達と関わる中で，互いの思いや考えなどを共有し，共通の目的の実現に向けて，考えたり，工夫したり，協力したりし，充実感をもってやり遂げるようになる。

NITS 独立行政法人教職員支援機構

幼稚園教育要領　第1章総則
第2幼稚園教育において育みたい資質･能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(H29改訂)

(5) 社会生活との関わり
家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに，地域の身近な人と触れ合う中で，人との様々な関わり方に気付き，相手の気持ちを考えて関わり，自分が役に立つ喜びを感じ，地域に親しみをもつようになる。また，幼稚園内外の様々な環境に関わる中で，遊びや生活に必要な情報を取り入れ，情報に基づき判断したり，情報を伝え合ったり，活用したりするなど，情報を役立てながら活動するようになるとともに，公共の施設を大切に利用するなどして，社会とのつながりなどを意識するようになる。

NITS 独立行政法人教職員支援機構

学校教育法第30条
小学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第21条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、
○基礎的な知識及び技能
○これらを活用して課題を解決するために必要な
思考力、判断力、表現力その他の能力
○主体的に学習に取り組む態度　・・・学力の3要素
特に意を用いなければならない。

NITS 独立行政法人教職員支援機構

高等学校学習指導要領解説 総則編

① 学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しをもって粘り強く取り組み，自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
② 子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

「生きる力」 一人一人が幸福に生きる 幸福な社会をつくる

NITS 独立行政法人教職員支援機構

令和３年１月26日に中央教育審議会が答申を出しました。その高校教育の部分は、「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」というところで議論した内容をまとめたものです。

ここに、生徒一人一人が自分の価値を認識するとともに相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り開き、持続可能な社会のつくり手となることを後押しするために、学習者側、学ぶ側に視点を置いて、生徒を主語にした高等学校教育を実現していこうということが書かれています。

生徒を主語にするとはどういうことでしょうか。高校生にいま何が大事なのでしょうか。新学習指導要領前文の最初に書いてあるのは、自分のよさや可能性を認識することができるようになることです。つまり、自己肯定感を持つことです。自分は大切な一人だという気づきから、一人一人はみんな大切なのだということが分かってきます。ただ、自分が大切な一人であることに気づけないでいる高校生も少なくありません。自己肯定感は、周囲の人間が気づかせてあげることが必要です。周囲から支えられ気づかされて、自分で気づいて考えて行動できるようになり、自立に向けて歩みを進めることができます。国語辞典で「自立」を引くと「他に依存しないこと」とありますが、依存すると依頼するというのは違います。頼ることがいけないのではなく、必要なときに頼ることができるのが自立ということではないでしょうか。

新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）
～多様な生徒が社会とつながり、
学ぶ意欲が育まれる魅力ある高等学校教育の実現に向けて～
令和2年11月13日

本審議まとめは、我が国の高等学校教育の有する意義や役割について改めて整理した上で、「非連続的」とも言えるほどに急激に変化する社会経済の中で、生徒一人一人が自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら、豊かな人生を切りひらき、持続可能な社会の創り手となることを後押しするために、「生徒を主語にした」高等学校教育を実現するべく、全ての高等学校における特色・魅力あ る教育の実現に向けた方向性を示すものである。

NITS 独立行政法人教職員支援機構

高等学校学習指導要領 ＜平成30（2018）年3月告示＞

前文

教育は，教育基本法第1条に定めるとおり，人格の完成を目指し，平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すという目的のもと，同法第2条に掲げる次の目標を達成するよう行われなければならない。（略）

これからの学校には，こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ，一人一人の生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが，各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

NITS 独立行政法人教職員支援機構

周囲が気づかせる。それが評価だと思います。評価は子どもに対する応援でなければいけません。おまえ駄目だっていうのは評価でなく、否定です。学習指導要領には、生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにする、ということが書いてあります。

これからの社会を生きていくために、多様な学びを通して、ものの見方や考え方を身につけ、自分で判断し、必要に応じて結びつけたり切り分けたりしながら、さらに考える。自分で考えたことを自分だけにとどめないで、外に出していろいろな人とやり取りをする。そういう中で確かめ、振り返り、改善し、工夫して自分の人生を幸せなものにしていき、さらには社会が幸せになっていくように考えて行動していく。

このような力をどうつけていったらいいのか。高等学校教育が、学ぶ生徒を主語にして、この問いに答え続けていくことが重要だと考えます。

自己肯定感
自分は、たいせつなひとりだ。
いまの自分が自分のすべてではない。
人間は学ぶことを通して成長する。
目の前の世界が世界のすべてではない。
動けば世界は変わる。

自分には何ができるのだろうか？
何かの役に立っているだろうか？
自分はここにいていいのだろうか？

周りが気づかせる。支える。

⇓ 評価

自分で気づく。考える。行動する。 自立

NITS 独立行政法人教職員支援機構

高等学校学習指導要領 ＜平成30（2018）年3月告示＞

第3款 教育課程の実施と学習評価
2 学習評価の充実 **教師の役割**

学習評価の実施に当たっては，次の事項に配慮するものとする。

(1) 生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また，各教科・科目等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して，学習の過程や成果を評価し，指導の改善や学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすようにすること。

(2) 創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう，組織的かつ計画的な取組を推進するとともに，学年や学校段階を越えて生徒の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること。

NITS 独立行政法人教職員支援機構

分科会

オンライン配信
8月25日(水)　14:00～

パネルディスカッション

コーディネーター

島根大学教育・学生支援本部
大学教育センター
教授
泉　雄二郎 様

司　会

フリーアナウンサー
枡田 ひとこ

パネリスト

内閣府（科学技術・イノベーション推進事務局）審議官
合田　哲雄 様
（リモートによる出席）

㈱エブリプラン執行役員
グローカル研究所長
㈱ＥＲＩＳＡ常務取締役
技術責任者
石田　学 様

島根県立出雲高等学校
ＰＴＡ会長
杉浦　弘明 様

島根県立出雲商業高等学校　ＰＴＡ会長
今岡　正和 様

（協議要約）

泉コーディネーター　荒瀬先生の講演では、来年度新入生から行われる新しい学習指導要領の目指しているもの、また、今年の１月に答申された「令和の日本型教育の構築」にも触れていただきました。まずは、パネラーの皆さんに荒瀬先生のご講演の感想をお願いします。

石田氏　荒瀬先生の話で驚いたのは、幼稚園の指導要領に非常に高度なことが書かれていることです。また、学び続ける前提として「自己肯定感」が必須という話もありました。自己肯定感は自分で築くことはなかなか難しいので、周りが支えて気づかせる必要があります。自分も自己肯定感を支えるようにしたいと思っています。

杉浦氏　私たちが受けた教育は、先生が主体でした。私が主体的な勉強ができるようになったのは、40歳になって大学院に入り、学び直したわけですが、この教育を幼稚園からできる今の子どもたちは幸せだと思います。わくわくするような教育が行われれば日本の未来は明るいと思います。

今岡氏　幼稚園の指導要領があるとは知らなかったので、後で見てみたいと思います。自立に関連してお話しになりましたが、小学校３年生の私の子どもが夏休みの日割りの計画を自分で立て、見事終わりました。

合田氏　時代に教育を合わせるのではなくて、時代を教育がリードする状況になってきました。経産省の人と話をするとＤＸという言葉がよく出てきます。ＤＸとは手持ちの解答手段から考えるのでなくて、課題から考え、抽象化し、複数の解答パターンを考えることです。抽象化は、算数・数学の学びです。仮説を立て検証し論理的に学ぶのは理科です。課題から考えることは、教科横断的な総合的な学習時間の探究活動そのものです。これからは「生徒を主語とした学び」が行われます。目の前の子どもたちが我々の思いもつかないようなアイディアや知識を生み出して我々を乗り越えていく時代になっていきます。そういう意味において、教育が社会をリードする時代になったと思っています。

荒瀬講師　合田さんが話された「教育が時代をリードしていく」は間違いありません。教育によって人が育ち、育った人が時代を作っていきます。子どもたちが「いろいろなことをしなければならない」と大人はとらえることが多いが、実は子どもたちは「いろいろなことをしたい」と思っています。ところが出し方がわかっていません。それを大人がどうしたら出せるような場面を作ったり、出し方を教えるか、そこが問われています。子どもたちが、それによって「やりたい」と思ったことができるようになり、子どもたちが時代を作っていく、そういう方向が「教育が時代をリードしていく」ことにつながると思います。

泉コーディネーター　荒瀬先生から、子どもたちがやりたいことを学びのベースにするという話がありましたが、自分が学んだ教育を思い出して、やりたいことが実現できてきたのか、やらされ感の教育だったとか、その当たり皆さんはどうでしたか。

石田氏　高校時代の勉強は答えがあるものについてそれを早く解きなさいでした。答えのない問題を解決する力は育ててこなかったと思います。若い世代が答えのない問題を解いていくことはうらやましく思います。

杉浦氏　私は高校時代、スプーンフィーディング（spoon feeding）、与えられる勉強を詰め込んで大学に入り、バーンアウト（burn out）してしまいました。医学部なので、試験のために勉強する面もありました。本当に勉強したいと思ったのは、社会人になってからです。高校時代に主体的に勉強する、疑問点を見つけ、仮説を立て、データや事実を自ら検証し、考察し、まとめを出す、そこまでできる子どもを育ててほしいと思います。

今岡氏　子どもたちは「やりたい」と思っています。赤ちゃんは、親がダメだよと言っても好奇心からいろいろなことをします。子どもの好奇心は学びにつながってきます。好奇心を学びの場で活かす教育が大切になってきます。

泉コーディネーター　これからの教育には探究心とか、好奇心を引き出すような教育が必要であるというご意見でしたが、現行の教育の課題はどこら辺にあると認識されていますか。

合田氏　私は「一浪すれば多浪する」と言われ、勉強しました。荒瀬先生の重要なキーワードとして「教育とは、内発を誘発するための外発である」という言葉があります。知的好奇心は内発でなければなりませんが、そのためには大人の働きかけが必要です。例えば、高校で全員が学ぶ数学Ⅰに二次関数が出てきますが、これは「トレードオフ」という事を学ぶことになります。この国の議論は「白か黒か」が多く、コロナの状況もあたかも「命か経済か」で議論されます。これを「トレードオフ」の考え方で、社会的合意を得ながら知恵を出して、当事者として責任を持って意志決定していくことが必要です。そういう思考方法として、二次関数のトレードオフという発想があるということを数学の先生には教えていただきたいです。保護者の方もそれぞれの仕事、専門性を活かして、今子どもたちが学んでいることがどんな意味があるのか教えてほしいと思います。「内発を誘発する外発」をどう仕込んでいくのかが、これからの大人の腕の見せ所です。

荒瀬講師　内発とは、「やりたい」という気持ちを大事にすることです。子どもたちはもともと好奇心を持っていますが、それが抑えられています。例えば、大学受験、就職試験や学校の定期テストのためには余計なことはせず、単語の一つでも覚えた方がいいと言ってはないでしょうか。

泉コーディネーター　堀川高校の探究型「すべては君の知りたいから始まる」というキャッチフレーズは、まさに次期学習指導要領を先取りしているフレーズです。ここからは、新学習指導要領に期待することについて聞

きます。新学習指導要領の設計にも係わられた合田さんから、どういう思いで関わってこられたかお話しください。

合田氏 数年前ですがＡＩが進化すれば、子どもたちの職業がなくなるのではないか、今の学校教育は役に立たないのではないかという議論が盛んに行われました。だが、ＡＩは文章の意味を理解しているわけではありません。大切なことは文章の意味を筋立てて読んでいく力や各教科のもののとらえ方や見方、考え方を働かせて思考する力を育むことです。例えば、源頼朝はなぜ京都から遠く離れた鎌倉に幕府を開いたかという問いを歴史の授業の発問の中に入れると幕府、武家政権、中世などの概念でとらえることが必要になります。また、ＡＩは他人と話をして協働するということはできませんが、私たちはそれができます。そのためにも子どもたちが協働するという態度を育むことも大事なのです。

泉コーディネーター これまでも10年に一度、学習指導要領は改訂されてきましたが、今回の指導要領は本気度が高いと思います。荒瀬先生、これまでの学習指導要領が改訂されても、うまく実行ベースに落ちなかったのはなぜだと思いますか。

荒瀬講師 これまでうまくいかなかったのは、「どう指導するか」に軸足があったからだと思います。先生がよくない、やり方がまずいということでは解決できないということが分かってきました。子どもたちは学びたいと思っているし、やりたいことは一杯あると思います。それを基にして「生きる力」につなげる方法を考えていく必要があります。合田さんがお話しになった二次関数の話しは象徴的な話しで、子どもたちが学ぶのはテストのためでそこで終わっています。子どもたちがどう学んで、何を身につけて、何ができるようになるか、どう成長して、社会で生きていくのかというところに視点を当てて、今後は進んでいきます。

泉コーディネーター 石田さん、ＡＩを使った医療システムの開発に携わっていらっしゃいますが、これからの世の中が必要とするものを考えたときに、新学習指導要領に期待することは何ですか。

石田氏 私は会社では人工知能の開発に携わっています。ＡＩが普及すれば仕事がなくなる、などという議論も数年前にはなされていましたが、今はＡＩをビジネスにどう活用していくのか、「深い学び」で取り上げられていた「知識を相互に関連させる」ような何かと何かをくっつけるような応用力を持っている人材が必要とされています。ただ、この状況は今後変わっていくかもしれません。ＡＩの開発とともにコンサルティングの仕事もしていますが、１つのメインの仕事の知識を深めていくだけでなく、全く別のフィールドの知識を融合して、つなぎ合わせることで新たな概念を作り出すことは重要だと考えていますので、今回の学習指導要領の改訂がそういった人材の育成に役立つならば期待できます。

泉コーディネーター コロナ禍にあって杉浦さんは地域医療を支えておられますが、感染症など思いもよらない事態が起こる中で、未来に対応できる子どもを育てるという意味で、学習指導要領に期待していることは何ですか。

杉浦氏 100年前はスペイン風邪がはやりました。10年前は新型インフルエンザ、今回コロナウイルス感染症が起こりました。このコロナが収まっても10年後に別の感染症が起こるかもしれません。コロナに限らず地球温暖化による災害や地震の問題が10年後に起きるとするとその問題を解決してくれるのは今の高校生です。それをしてくれるように今回の新学習指導要領で育ってほしいと思います。

泉コーディネーター 島根県では都会感覚でいうグローバルやＡＩの社会はピンとこないところもあります。今岡さんは、地域の課題と新学習指導要領はどうつながるとお考えでしょうか。

今岡氏 学習指導要領の改訂に加えて、地域教育が主流になってくるのではと思います。今の子どもたちは幼いころからＩＣＴ器機に触れています。生活の必須のスキルだと思っているＩＣＴ器機を利用し、興味ある事柄を調べたりすれば好奇心につながってくると思います。なので、地域においても地域教育と並行しながら、先生たちが積極的にＩＣＴ器機を導入してくれたらいいと思います。

荒瀬講師 子どもは小さくてまだ動き回れないときに、ものに触れるようになると触ります。そして口に入れる

ようになります。なぜ、口に入れるのか、食べるという知識をもっているのではなくて、食べることによって外界を認識しようとします。全ての子どもに主体的に学習に取り組む力があります。「そんなことをしたらダメ」などと逆に教育がしているのではないでしょうか。日高敏隆というチョウの世界的研究者は、小学校３年生の頃、一生チョウを調べたいと思っていましたが、親が困って学校の先生に相談したら、その先生は「外国にもチョウがいるぞ、見たいだろう。外国へどうしたらいけるか、調べたり本を読まなければいけないなぁ。外国の言葉も覚えなければならないなぁ。」と本人に話したそうです。我々は、ダメだと言われたことはしなくなります。いいよと言われたことはやっています。人は伸びるように生まれています。

泉コーディネーター　合田さん、子どもたちの内発的な学びを阻害する要因がこれまでの教育にあったのではないでしょうか。打破するために何が必要だとお考えですか。

合田氏　高校について言えば、１つ深刻な課題があります。普通高校における、文理分断の問題です。高校生の七割が普通科で学んでいますが、そのうち七割が文系を選んでいます。つまり、高校生の半分が普通科の文系で学んでいます。三科目型の入試を目指そうとすると、高２で理数教科を捨てる構造になります。理数の学びから逃走しても、就いたホワイトカラーの仕事が、どんどんＡＩに置き換わっている中で、目の前の受験のために理数科目を捨てろというのは、未来社会を担う高校生にリスクを負わせることになります。この話しはジェンダーバランスという視点からも大きなアンバランスとなっています。ＯＥＣＤのＰＩＳＡという全世界学力調査があります。義務教育を修了したときにレベル４以上の理科も数学も得意な女性は同世代の４割近くいますが、高校に入って普通科の理科を選択する人は16％に減り、大学で理学、農学、工学分野に進学する人は５％になってしまいます。この文化的社会的バイアスについては、荒瀬先生の「生徒を主語にした学び」という話がありましたが、何のための学びかを考えたときに、「機械工学をやってもなぁ」「物理学をやってもなぁ」という大人の雰囲気は子どもの選択に影響を及ぼします。

１月の中教審は、正解主義と同調圧力を乗り越えるということを高らかに発信しました。この国の社会はあらかじめ正解が決められ、大人が容易に採点できるテストや受験には激しい競争を強いるのに、大人が理解できない新しいアイディアや才能は相互監視の中で抑圧する息苦しさがあります。これを転換することが、主語を高校生にする学びへの転換、そのためには保護者である大人も、そうでない大人も変わらなければなりません。

泉コーディネーター　社会につながった教育は、地方創生が叫ばれている島根県のような地方では重要です。社会とつながって行う教育はどんな教育でしょうか。

今岡氏　専門高校では、社会に出るための準備教育は行われています。挨拶などがそうです。生徒同士のコミュニケーションは社会に出る前の教育として大事です。話しにくい人と話すときにもうなずく、終わったら拍手する、いろんな人とコミュニケーションを取りながら自分の意見が言える、他人の意見を取り入れる、そういうところが社会に出るまでの教育で重要となると思います。

合田氏　社会に開かれた教育課程で最も大事なのは、学校で育まれる資質能力がこれからの社会を創っていくという認識を共有することです。今岡さんがお話されているように、専門高校は、地域に支えられ、地域が子どもを育てていると思います。

杉浦氏　学校においては社会人は先生であり、また、自分の親も社会人としての一面を持ちます。ＰＴＡという組織には様々な職業を持った親がいます。そんな親とのつながりから、この町にはこんな職業があるのかと子どもたちに分かってもらうチャンスですので、ＰＴＡの関わりは非常に大切だと思います。

石田氏　我が社も高校生の企業見学の受け入れや高校の魅力化向上のための授業にも取り組んでおり、コンサルタントやＡＩのエンジニアがどのような仕事をしているのか紹介しています。それが高校生の今後の勉強のモチベーションになると思います。昨年度は高校生をインターンで受け入れ、事業計画やイベントの計画を立てさせました。我々にとっても、高校生の発想を聞くのは非常に刺激的で、そのことで新たなビジネスの発想が

生まれたり、地域を活性化したりする方策につながりますので、これからも高校生とつながって事業を進めていきたいと思っています。

荒瀬講師　「社会に開かれた学校」には決まった形があるわけではなく、いろんな形でつながりができることが大事です。駅はだれも知っているが、駅の中でどういう仕事があるのかを見ていくと、知らないことがいっぱいあります。電車が動くためにはどんな準備が必要か、どういう人がどんな思いでやっているのか、そういう広がりがこれから大事になってきます。学校と教科書だけでなくて、社会と学校という結びつきも大事だと改めて思いました。

泉コーディネーター　社会に開くと言うことは、結局、様々な価値観と子どもたちが出会うということでもあります。ここに自分の活躍の場があるという子どもたちの認識にもつながり、自己肯定感にもつながると思います。島根大学では昨年から大学入学共通テストを課さない総合型選抜「へるん入試」を行っています。受験生に自分の好奇心や探究心は何かについて作文や面接の中で語ってもらい、評価します。入学した生徒に聞くと「自分の学びのタネ（好奇心や探究心）が明確になったので、この入試に挑戦した」「高校時代取り組んだことが高く評価されると言うことで、この入試でチャレンジした」と話します。高校生の好奇心や探究心を引き出すような機能を入試が持つようにしていきたいと考えています。

石田氏　子どもたちが自己肯定感を持つことを支える大人になりたいと考えています。甥がおり「ゲームばかりしないで勉強しなさい」と古典的なしかり方をされていますが、授業で三角関数や虚数を学んだ際に「これ、何に使うのか」と聞かれたので、「モンスターハンターの３Ｄの描写は三角関数と行列変換の塊だよ」と言ったら、数学はそういうところに使われているとわかり、数学に興味を持てたと言いました。親の視点とは違うところ、子どもたちから好奇心を引き出すことができたらいいと思っています。

杉浦氏　多くの子どもたちが取り組んでいる課外活動も１つの事をつきつめるという意味でとても大事です。ＰＴＡは地域社会のため、広くは日本の未来のため、一人ひとりの子どもの主体性を持った学びを応援していきたいと思っています。

今岡氏　子どもとの信頼関係を大切にしたいと思っています。コミュニケーションを取るために褒めるハードルを下げています。娘がお菓子を作ったが、美味しいと褒める前に、作ることを褒める。そうすると二回褒めることになります。そこから子どもとのコミュニケーションが生まれてきます。子どもたちの状態、部活、恋愛など状況を把握することによって、家庭での学びの環境を整えることが大事だと考えています。

荒瀬講師　今、教職員支援機構というところで働いています。一人ひとりの教職員が誇りを持って、生き生きと楽しく、おもしろいなぁと働いていれば、生徒たちも「何が面白いのか」考えてくれる事になります。先生がそうでなければ、基本的に学校がつまらないものになります。学校が楽しくなるために、教職員が楽しくなるにはどうしたらいいのか、今後も考えていきたいと考えています。

泉コーディネーター　皆様の中にご縁が生まれましたでしょうか。互いの思いや行動がつながって、お互いがつながって、未来につながる教育や学校づくりがうねりとなって広がっていくことに期待をして終わりたいと思います。

資　料

大会日程・大会内容・会場等

8月25日(水)・・・全体会　島根県内参加者受付 / 8:00～8:50

全体会 / 開会式、表彰式、記念講演・記念公演、閉会式　島根県民会館大ホール
会場からオンラインライブ配信　9月1日(水)から12月31日(金)までアーカイブ配信

時　　間	内　　容
8:50 ～	配信映像開始
9:00 ～ 9:20	参加連合会紹介
9:20 ～ 9:35	アトラクション 島根県立松江商業高等学校　吹奏楽部
9:40 ～10:35	開会式 開式の辞、国歌演奏、大会会長式辞、来賓祝辞、来賓紹介、表彰式、閉式の辞
10:40 ～12:00	記念講演・公演 講　師　小泉八雲記念館館長　小泉　　凡氏 俳　優　佐野　史郎氏 ミュージシャン　山本　恭司氏 演題「小泉八雲がみた日本の魅力～五感でとらえた明治日本のすがた」 朗読「八雲彷徨～神々の首都　松江から」
12:05 ～12:20	アトラクション 島根県立浜田商業高等学校　郷土芸能部
12:25 ～13:00	閉会式 開式の辞、全国高P連旗返還、全国高P連旗授与、次期開催地挨拶、閉会の挨拶、閉式の辞

8月25日(水)・・・分科会オンライン配信開始日

14:00～　6つの分科会ごとにオンライン配信　その後、12月31日(金)までアーカイブ配信

第1分科会	アトラクション	島根県立江津高等学校　神楽愛好会
	テーマ	「Withコロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」 ～予測不可能な未来を生きていくには～
第2分科会	アトラクション	島根県立江津高等学校　神楽愛好会
	テーマ	「正しく怖がる」で創るネットとのご縁 ～SNS・スマホで絶対に失敗しない方法とは～
第3分科会	アトラクション	島根県立三刀屋高等学校　演劇部
	テーマ	「地域で育む未来への学び」 ～教育の魅力化でひろがる新たなご縁～
第4分科会	アトラクション	島根県立三刀屋高等学校　演劇部
	テーマ	体験でつなぐ人々とのご縁 ～「人生100年時代」「不確かな時代」を生きるためのキャリアデザイン～
第5分科会	アトラクション	島根県立出雲農林高等学校　出農太鼓部
	テーマ	グローバルにつなぐ教育とのご縁 ～SDGs(持続可能な開発目標)と新たな明日への礎のために～
第6分科会	アトラクション	島根県立出雲農林高等学校　出農太鼓部
	テーマ	未来社会に対応するための教育とのご縁 ～「主体的・対話的で深い学び」や「学校と社会の連携・協働」のあり方～

資　料

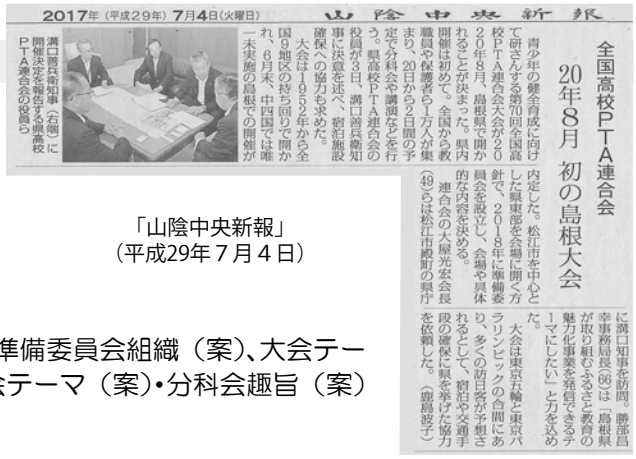
大会までの主な歩み

平成27年（2015）

6月　7日	島根県高Ｐ連定時総会 平成32年度全国高Ｐ連大会島根大会開催の意思決定を決議

平成29年（2017）

2月　8日	島根県高Ｐ連第３回評議員会 島根大会準備対策委員会の設置承認
6月24日	平成29年度全国高Ｐ連定時総会 第70回全国高Ｐ連大会島根大会受諾挨拶（大屋会長）　正式内定
１２月　２日	第３回島根大会準備対策委員会（兼島根県高Ｐ連第３回評議員会） 大会基本構想（案）、大会概要（案）、準備委員会組織（案）、大会テーマ（案）・大会開催趣旨（案）、分科会テーマ（案）・分科会趣旨（案）他


2017年（平成29年）7月4日（火曜日）　山陰中央新報

全国高校PTA連合会
20年8月　初の島根大会

青少年の健全育成に向けて研さんする第70回全国高校PTA連合会大会が2020年8月、島根県で開かれることが決まった。県内開催は初めて。全国から教職員や保護者ら1万人が集まり、20日から2日間の予定で分科会や講演などを行う。県高校PTA連合会の役員が3日、溝口善兵衛知事に決意を述べ、宿泊施設確保への協力も求めた。

大会は1952年から全国9地区の持ち回りで開かれ、6月末、中四国では唯一未実施の島根での開催が内定した。松江市を中心とした県東部を会場に開く方針で、2018年に準備委員会を設立し、会場や具体的な内容を決める。

連合会の大屋光宏会長（49）らは松江市殿町の県庁に溝口知事を訪問。勝部昌幸事務局長（66）は「島根県が取り組むふるさと教育の魅力化事業を発信できるテーマにしたい」と力を込めた。

大会は東京五輪と東京パラリンピックの合間にあり、多くの訪日客が予想されるとして、宿泊や交通手段の確保に県を挙げた協力を依頼した。（鹿島波子）

溝口善兵衛知事（右端）に開催決定を報告する県高校PTA連合会の役員ら

「山陰中央新報」
（平成29年７月４日）

平成３０年（2018）

5月１９日	第５回島根大会準備対策委員会（兼島根県高Ｐ連第１回評議員会） 大会テーマ・大会趣旨決定
6月　9日	平成30年度島根県高Ｐ連定時総会 準備委員会組織決定、基本構想決定
8月　5日	島根大会準備委員会設立総会 大会準備経過報告、島根大会の概要説明、島根大会に向けた諸準備等
8月20～21日	全国高Ｐ連大会佐賀大会　参加・視察
１２月２２日	第１回島根大会準備委員会運営委員会 「島根大会概要初版(案)」、基本構想と大会までのスケジュール、実行委員会組織図（案）、全体会・分科会の概要案、アトラクション、島根県紹介ビデオの制作、島根大会各学校動員数（案）

ポスター・シンボルマーク選考会
（平成30年11月12日　ホテル白鳥）

平成31年・令和元年（2019）

2月１６日	第２回島根大会準備委員会 シンボルマーク・ポスターの発表、「島根大会概要初版(案)」、島根大会実行委員会の設置(案)
6月　8日	島根大会実行委員会設立総会 「島根大会概要第２版」、全体会（記念講演講師決定、運営・進行計画、会場収容計画・見取り図等）、分科会（基調講演講師・コーディネーター・パネリスト、アトラクション、運営・進行計画、会場収容計画・見取り図等）、宿泊・輸送計画、諸会議・レセプション会場（収容人数、座席見取図、運営・進行計画等）、予算案、協賛金（大会要項広告掲載）募集の実施承認等
7月２７日	第１回島根大会運営員会・第１回会場部会・部会 「島根大会概要第２版 6.30version」、実行委

2019年（平成31年）2月17日（日曜日）　山陰中央新報

出雲高・新野、若槻さん最優秀
全国高校PTA連　準備委が表彰

ポスター　シンボルマーク

来年8月に県内で初開催する第70回全国高校PTA連合会大会の準備委員会が16日、松江市殿町の県庁

原画を生かしたポスター案

原画を生かしたシンボルマーク案

「山陰中央新報」（平成31年２月17日）

	員会組織図（班長・副班長の選出依頼）、全体会・分科会の企画・運営の今後の準備・検討項目、京都大会島根県ブースの設置
8月21日～23日	全国高Ｐ連大会京都大会　参加・視察　総勢160名 島根県紹介ブース設置、閉会式で島根大会紹介ＤＶＤ映写・しまねっこ出演・大屋会長挨拶

第１回島根大会実行委員会
（令和元年６月８日 サンラポーむらくも）

京都大会での島根大会広報ブース
（令和元年８月22日　京都市勧業館みやこめっせ）

島根大会の紹介に駆けつけた島根県観光キャラクター「しまねっこ」と一緒に（令和元年８月23日 京都市勧業館みやこめっせ）島観連許諾第6946号

全国高Ｐ連旗を引き継ぐ大屋光宏会長
（令和元年８月23日　京都市勧業館みやこめっせ）

参加者全員で島根大会のアピール
（令和元年８月23日　京都市勧業館みやこめっせ）

１０月　１日	島根県高Ｐ連ＨＰリニューアル並びに島根大会ＨＰ開設
１０月２４日	全国高Ｐ連臨時総務委員会 「島根大会概要第３版」、都道府県市連紹介要領お願い等
１２月２１日	第２回島根大会運営員会・第２回会場部会・部会 「島根大会概要第４版」、大会運営会議、レセプション、実行委員会組織図（案）、係員の配置計画と動員人数、ブース設置と物販販売、協賛金の募集、宿泊・輸送計画等

令和２年（2020）

４月１０日	全国高Ｐ連事務局よりメール　島根大会中止の第一報（延期も視野）
４月１３日	島根県高Ｐ連正副会長会議 全国高Ｐ連より延期の決定が来たら、島根は受諾することを決定
５月　１日	全国高Ｐ連より、理事会決定事項報告　みなし決議による島根大会延期の決定通知
６月２６日	令和２年島根県高Ｐ連定時総会（書面議決）　島根大会延期の承認
７月３０日	島根県高Ｐ連正副会長会議 修正シンボルマーク・修正ポスター、新大会テーマ・趣旨決定

資　料

１１月２１日	第３回島根大会実行委員会兼島根県高Ｐ連臨時総会 島根大会準備経過報告、「大会新概要Ⅰ版（案）」、コロナ禍における実施について、高校生販売は取りやめ決定等
１２月　５日	全国高Ｐ連会長・事務局長とのリモート会議 島根大会の新型コロナウイルス対策を含めた新概要説明

令和３年（2021）

２月　６日	全国高Ｐ連研修会（リモート） 「大会新概要Ⅰ版（案）」、新型コロナウイルス対策を施しての通常大会開催に向けて準備を進める。コロナ禍の状況が悪化した場合には分科会も含めてオンライン開催を考えることを確認
２月１３日	島根大会第３回運営委員会・第３回会場部会 コロナ禍における全国大会準備の概要と変更開催点の説明
３月３０日	全国高Ｐ連会長、事務局長とリモート会議 全国大会は、開催実施の方向を確認（無観客開催も視野）
５月２０日	通常開催の「大会案内」、「Web 参加申込案内」の全国の学校への発送を中止
６月１２日	第４回島根大会実行委員会 「無観客概要版」説明、無観客オンラインでの開催を決定
６月２６日	全国高Ｐ連リモート会議 「無観客概要Ⅱ版」説明　参加申込みは各学校（単位ＰＴＡ単位）で各都道府県市高Ｐ連・協議会を通じて行うことを決定
７月　２日	新「大会案内」 各都道府県市高Ｐ連・協議会を通じて全国の学校にメールで配布　参加申込開始
７月２４日	第５回島根大会実行委員会 無観客オンライン大会実施内容、新実施体制・組織協議
７月26～29日	分科会前撮り　TSK 本社会議室
８月　４日	各都道府県市高Ｐ連・協議会を通じて参加申込み校に新「大会要項」（印刷製本）を送付
８月１１日	分科会高校生アトラクション前撮り　プラバホール
８月２５日	第70回全国高Ｐ連大会島根大会（全体会） オンラインライブ配信　島根県民会館 14:00 から　分科会（アトラクション含む） オンライン配信。その後、オンラインアーカイブ配信開始（12月31日まで）
９月　１日	全体会オンラインアーカイブ配信開始（12月31日まで）

島根大会臨時運営委員会係打ち合わせ
（令和３年４月22日 サンラポーむらくも）

第４回島根大会実行委員会
（令和３年６月12日 サンラポーむらくも）

山陰中央新報（令和３年7月30日）

第70回全国高等学校PTA連合会大会島根大会運営組織（8月25日版）

実行委員会会長	大屋　光宏（島根県高Ｐ連顧問）
実行委員会副会長	飯塚　大幸（島根県高Ｐ連会長、松江北高校ＰＴＡ会長） 今岡　正和（島根県高Ｐ連副会長、出雲商業高校ＰＴＡ会長） 吉岡　弘恵（島根県高Ｐ連副会長、松江市立皆美が丘女子高校ＰＴＡ会長） 前澤　信也（島根県高Ｐ連副会長、浜田商業高校ＰＴＡ会長） 常松　　徹（島根県高Ｐ連副会長、松江北高校校長） 志波　英樹（矢上高校校長） 宅和　英人（松江農林高校ＰＴＡ会長） 戸谷　　淳（松江工業高校ＰＴＡ会長） 村松　文治（松江北高校ＰＴＡ副会長） 足立　朋広（情報科学高校ＰＴＡ会長） 神田　　治（三刀屋高校ＰＴＡ会長） 杉浦　弘明（出雲高校ＰＴＡ会長） 森口　英司（矢上高校ＰＴＡ会長）
参　　与	野々内昭浩（島根県教育庁社会教育課長）
相　談　役	松尾　　強（島根県高Ｐ連元会長） 幸増浩一郎（島根県高Ｐ連前会長） 秦　　征治（島根県高Ｐ連前事務局長）
監　　事	大坂　慎也（島根県高Ｐ連監事、松江東高校ＰＴＡ会長） 神田　　治（島根県高Ｐ連監事、三刀屋高校ＰＴＡ会長） 岩木　忠男（島根県高Ｐ連監事、邇摩高校ＰＴＡ会長）

総　　務　　部

担当：勝部　昌幸（高Ｐ連事務局長）、恩田　佳雄（高Ｐ連事務局）、山田　和彦（高Ｐ連事務局）
　　岡本　順子（高Ｐ連事務局）、臼井　泉　（高Ｐ連事務局）、加藤　淳子（高Ｐ連前事務局）

県内参加者受付

係長：恩田　佳雄（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：伊藤　尚子（松江北）
担当：大野　陽太、門脇　重光（松江北）坂本　拓三、木村　直樹（松江北Ｐ）、赤山　克司（松江東）

来賓・大会役員受付

係長：恩田　佳雄（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：伊藤　尚子（松江北）
担当：村松　文治、福田　龍太（松江北Ｐ）

講師・表彰者・出演者受付

係長：恩田　佳雄（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：伊藤　尚子（松江北）
担当：福間　健広、森本　真晃（出雲商業）

石川県・その他関係者・報道受付

係長：恩田　佳雄（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：伊藤　尚子（松江北）
担当：勝部　一政、安井　健二（出雲商業）

1　階　ロ　ビ　ー

係長：臼井　泉（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：志波　英樹（矢上）
担当：野々村　卓也、戸谷　淳、寺津　豪佐、新宮　七美、池尻　由香（松江工業Ｐ）、
　　高野　豊、錦織　英宣、目附　直人、真明　英之（松江工業）

2階エントランス

係長：山田　和彦（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：熊谷　修山（浜田）
担当：磯田　泰将、川上　誠（皆美が丘女子）福井　英樹（皆美が丘女子Ｐ）、
　　中澤　雅美（出雲商業）宅和　英人（松江農林Ｐ）井上　智寿、長瀬　真奈美（松江工業）

ケ　ー　タ　リ　ン　グ

係長：岡本　順子（高Ｐ 連事務局）　　リーダー：横山　紀文（皆美が丘女子）
担当：加藤　淳子（高Ｐ連前事務局）中澤　円、松浦　由紀子（皆美が丘女子）、塩毛　七栄（高Ｐ連元副会長）
　　三代　喜政、中田　典子（島根県Ｐ連事務局）

ス　テ　ー　ジ　補　助

係長：末次　勝（TSK）　　リーダー：平山　哲也（松江工業）
担当：門脇　通弘、三好　和彦、杉谷　達雄、稲葉　陽士、山田　晋吾（松江工業）

資　料

記　　録

1．オンライン参加状況

8月3日時点　　参加校　2,325 校

12月9日時点　　参加校　2,368 校（参加率 61.4％）

（＋ 1 全国高 P 連事務局、＋ 50 都道府県市高 P 連・協議会事務局）

2．全体会リアル参加者

8月25日(水)　9:00～13:00　　会場　島根県民会館（大ホール　1,537 席）

来賓 8 名　全国高 P 連役員 11 名　表彰者 4 名　石川県大会旗授与・視察 6 名

島根大会実行委員会 8 名　一般参加者（島根県内参加希望会員）54 名　その他大会関係者 7 名

大会ボランティアスタッフ（島根県内希望会員）54 名

高校生アトラクション出演者（引率 5 名、生徒 68 名）

手話通訳 3 名　看護師 1 名　報道 4 名　実行委員会事務局 5 名　　計 238 名

3．オンライン配信

①全体会オンラインライブ配信　　8月25日(水)　9：00 ～ 13：00

②分科会オンライン配信　　8月25日(水)　14：00 ～

③全体会オンライン配信　　9月1日（水）～

※全体会、分科会ともに令和2年12月31日正午までアーカイブ配信（パスワード付き）

④オンラインアクセス状況

視聴回数

		8月25日	9月6日	10月27日	11月1日	11月26日	12月6日	12月31日
都道府県紹介				149	162	220	235	285
全体会	ライブ配信	5,813	5,813	5,813	5,813	5,813	5,813	5,813
	アーカイブ配信		455	1,243	1,276	1,389	1,425	1,537
第1分科会		738	2,553	3,629	3,664	3,858	3,896	4,072
第2分科会		570	1,257	1,941	1,978	2,149	2,190	2,346
第3分科会		541	1,200	1,754	1,771	1,843	1,862	1,968
第4分科会		409	925	1,479	1,495	1,590	1,605	1,686
第5分科会		324	746	1,179	1,193	1,287	1,305	1,420
第6分科会		287	716	1,182	1,196	1,289	1,316	1,422
合計		8,682	13,665	18,369	18,548	19,438	19,647	20,549

※全体会の視聴回数は、8/25のライブ配信と9/1以降のアーカイブ配信の合計。

4．前撮り収録

①分科会

7月26日(月)～29日(木)　第 1 分科会～第 6 分科会　　会場　ＴＳＫさんいん中央テレビ本社　会議室

②高校生アトラクション

8月11日(水) 江津高校、出雲農林高校、三刀屋高校　　会場　松江プラバホール大ホール（無観客）

5. 新型コロナウイルス感染予防対策

①一般参加者の参加人数の制限
②すべての大会参加者、大会関係者の名簿作成（連絡先の記載）
③全員のマスク着用
④会場入口に、自動体温測定器設置
⑤受付にビニール製仕切り、手指消毒用アルコール設置
⑥受付時、配布物の手渡し頻度の削減
⑦会場の席は全席指定席
⑧開会式における舞台壇上の主催者席、来賓席にアクリル板で仕切りを設置
⑨マイクの消毒交換と演台の消毒
⑩県外の参加者へのＰＣＲ検査または抗原検査依頼
⑪接触アプリ（ＣＯＣＯＡ）の利用の呼びかけ
⑫看護師の常駐
⑬係スタッフに弁当支給無し

6. 印刷発行物

①『大会要項』発行部数　6,000 部　大会ＨＰ掲載ＰＤＦ版
②『大会ポスター』
　令和２年版　250 部／令和３年版　300 部
③『大会案内』 9,200 部　　※発送せず
　『Web 申込み方法』 4,160 部　※発送せず
④『大会報告書』 400 部　大会ＨＰ掲載ＰＤＦ版

7. 大会配布物

・コングレスバッグ（松江コンベンションビューロー製）　　参加者・スタッフ用　165 袋
（内容）大会要項、新型コロナ感染症予防のお願い（Ａ４）、大学生協連紹介パンフレット

8. 大会ロゴ入りスタッフ用ポロシャツ

73 着作成

9. 開催方法変更に伴うキャンセル

①６会場のうち５会場のキャンセル
②宿泊キャンセル、輸送関係キャンセル
③警備・会場内外の案内掲示、広報等その他キャンセル

10. その他

①報道　読売新聞島根版　島根日日新聞　ＴＳＫさんいん中央テレビニュース　マーブルＴＶニュース
②救護室利用状況　０人
③落し物・忘れ物　０件
④感染者の報告　　０件

編 集 後 記

2018(平成30)年６月９日、島根県高Ｐ連定時総会で決議された島根大会「基本構想」には次のようなことが謳われています。「島根大会を県高Ｐ連が主管するにあたり、われわれ県高Ｐ連会員一人一人が自然、文化、歴史、人とのふれあい溢れるふるさと島根の魅力を見つめ直し、地域と高校生を結びつける要としての家庭の役割を考えていくいい機会となり、地方から新しい人の流れをつくり出すことに全国の高Ｐ連会員と共有することができる場としたい。そして、この全国大会の開催の準備・運営をすることで県内単位ＰＴＡどうしが結びつきを高め、チームワークをつくりだすことで、島根県高Ｐ連が今以上にひとつになることを目指すのも大きな意義でもある。」中国・四国地区で全国大会を開催していないのは島根県だけであり、必然的に主管県高Ｐ連となった私たちであるが、当時何のために経費を費やしてまで全国大会を引き受けなければならないのかという声があり、島根県高Ｐ連が一つになることを目標に開催準備が始まったのでした。

大規模な会場施設がなく会場の分散や準備会議を開くにしても県都への出席には１日または２日を要する学校があるなど、地方開催ゆえの多くの課題を乗り越え、2020(令和２)年８月の開催まで何とか近づきました。しかし、遠い世界から聞こえていた新型コロナウイルスによるパンデミックは、それまでの準備にかかった労力を水泡のように消し去りました。それでも、全国高Ｐ連の島根大会１年延期の判断は、消えようとする最後の泡の一つを守ってくれました。

2021(令和３)年に入っても、新型コロナウイルス感染症は収束するどころか猛威はさらに強まり、通常での開催は困難となり、全国大会初の無観客オンライン開催での実施に踏み切ったのは、開催２ヶ月前のことでした。５月頃から、いろいろな段階での開催を考えてはいましたが、その最悪のパターンを実施することになったのです。関係諸機関、出演者の皆さまには延期から一年後のスケジュールを空けて待っていただいていました。そのため、オンライン開催であっても、通常開催の内容にできるだけ近い内容にすることを心がけました。もう一度作り直す資料や依頼文書の数は半端ではなく、矢継ぎ早になる電話、そしてＰＣ画面いっぱいに広がるメールの画面、毎日のように湧き上がる課題の解決への奔走、事務局にとっては矢のような毎日が過ぎていきました。

2021年８月25日、全国の会員の皆さまの様々な思いを乗せて島根大会は無事に終了することができました。１ヶ月後、大会関係者からの新型コロナウイルス感染者が出なかったことを確認し本当の意味で大会は終わりました。心の片隅に引っかかることは、「基本構想」にあった島根県高Ｐ連が今以上に一つになるような機会が、大会を縮小したために持てなかったことです。ただ、困難を克服して結果を残したことは島根県高Ｐ連の今後の活動に何らかの良い影響を及ぼすことを信じています。

振りかえれば、日々励ましていただいた多くの方がいらっしゃいました。各都道府県市高Ｐ連・協議会事務局には参加募集様式を急遽変更したのですが、傘下加盟校の申し込みをとりまとめていただきました。このご協力が大会を開催できた一番の要因ではないかと思っています。各都道府県市高Ｐ連・協議会事務局にお礼を申しますとともに、次の方たちにも深甚なる感謝の意を表したいと思います。全国高Ｐ連泉満会長を始めとする全国高Ｐ連の皆さま、オンライン参加をいただいた会員の皆さま、コロナ禍の厳しい状況にもかかわらず全体会にご参加いただいたご来賓・全国高Ｐ連役員・県内高Ｐ連役員・県内一般参加会員の皆さま、新たに係員として参加いただいた県内会員の皆さま、何とか良い大会になるよう惜しみない協力をいただいた関連業者・地方自治体の皆さま、たくさんの方々の支えがあって、乗り切れた大会でした。そして最後に、始終私たちをリードしていただいた大屋光宏会長のもとご協力いただいた島根県高Ｐ連の皆さま、手前味噌にはなりますが骨身を惜しまず、全力で奮闘いただいた島根県高Ｐ連事務局の皆さま本当にありがとうございました。

（島根大会実行委員会　事務局長　勝部　昌幸）

We had twists and turns, but arrived here.

一般社団法人全国高等学校PTA連合会
〒101-0025　東京都千代田区神田佐久間町2-1　奥田ビル301号
TEL.03-5835-5711　FAX.03-5835-5757

島根県高等学校PTA連合会
〒690-0876　島根県松江市黒田町538
TEL.0852-22-8602　FAX.0852-22-8735

印刷・製本／松栄印刷有限会社

PARENTS ARE TEACHERS
AND HOME IS A CHILD'S FIRST
AND MOST IMPORTANT CLASSROOM
THE 70TH ALL JAPAN HIGH SCHOOL
PTA MEETING IN SHIMANE 2021